

唐招提寺藏四分律行事鈔卷下之三院政期点訓読文

松 本 光 隆

土 居 裕 美 子

岡 野 幸 夫

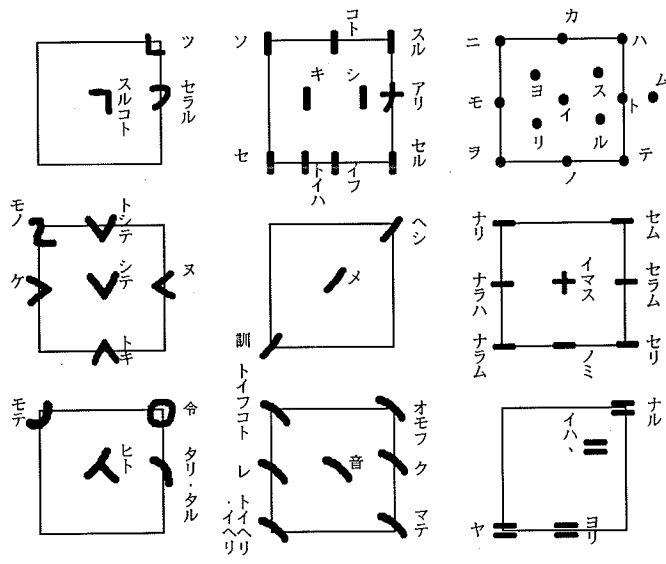
訓読文凡例

- 一、本訓読文は、唐招提寺藏四分律行事鈔卷下之三院政期点（影印は、『鎌倉時代語研究』第十八輯に掲載）に加点された朱点に従って、全文を訓読したものである。なお、墨書の訓点については、訓読注に掲げた。
- 一、原本の仮名は片仮名で、ヲコト点（喜多院点）は平仮名で翻字した。又、私意を以て補読した部分は（ ）で括って示した。
- 一、原本の破損等による難読の箇所については、「」に包んで、推読した箇所がある。
- 一、原本の割書き部分は、《 》を付してこれを示し、割書き内の改行は、〵で示した所がある。
- 一、行頭の漢字の右肩に▲の符号を付して行の変わり目を示した。
- 一、原本の漢字右下の「・」は「。」で、漢字中央下の「・」は「・」で、漢字左下の「・」は「意」で、漢字左中央の「・」は「卷」で翻字し、私意によつて適宜「」点を加えた。
- 一、本文に二種以上の訓読が存する場合は「₁」「₂」として異読を立て、不読字は「」に括って示した。

一、再読字については、再読の二度目の読みを「當」(音讀)「須」(音讀)の如く示した。

一、訓読文についての注記は、訓読文本文の該当の文字の肩に*印を付し、訓読文末尾に纏めて掲げた。

(ヲコト点図)



(仮名字体表「朱点の字体のみを示す」)

給	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
下	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
人	踊字	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
人	シ	井	リ		三	ヒ	ニ	キ	シ	イ	イ
云	云		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
云	云		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	事	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	下		シ		大	へ	子	子	せ	ケ	エ
	奉	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	上	シ	ロ	ヨ	モ	マ	ノ	ト	ソ	コ	

1 ▲四分律刪繁補闕行事鈔卷下之三 十三

2 ▲頭陀行儀第廿一 僧像致敬第廿二造立像寺法附

3 ▲訃請設則第廿三

4 ▲頭陀行儀篇第廿一

5 ▲夫レ報力の増上ナルは行す(るに)精潔返に成る、故に能ク高ク衆「類(を)」超(え)て棘ツルリ拔ヌケテ群に(あら)不

6 ▲是を以(て)釋迦一化には盛ホカ(に)斯の徳返を稱(せし)めたり、故(に)凡そ制返する所「者(は)竝(に)多食(を)

7 爲(す)、凡(そ)開返▲教の中には先ツ此の行返を揚アケたり、疲ツカレ怠(る)「之」客返を進めて「禪定(の)」「之」城(に)「

8 趣ケ使返(めむ)とは欲(る)なり、「染塵(の)」「之」夫キを「策(して)」「尸羅(の)」「之」陞シに登ノル、此レ其

9 の大意(なり)「也」。智論(に)云(く)、佛意、弟子(を)して▲道返に「隨(ひ)」、行して世の樂返を捨(せ)令サむ、

10 故に十二の頭陀返を讀めて本返と爲シタマフなり、因緣返有(り)て已ヤムこと得得ヘカラ不、而も▲餘の事返

11 を聽(す)と云云。中返に就(き)四返(に)分(つ)、一(には)惣名ソウを釋し、二(には)數返を列(ね)體返

12 を明す、三(には)諸部の異行をいふ。▲四(には)雜(り)て諸法返を出(す)となり、初(め)に惣名返を釋し

13 て徳返を顯(する)は善見(に)云(く)。頭陀者トト漢漢に▲抖ト搥ト(と)言フ。謂ク煩惱返を抖ト搥トし、諸の滯着返を離シ

14 ル、そ、聖善住意天子經に云(く)。頭陀者トト食欲瞋恚愚癡三界の六入返を抖ト搥トするなり「抖ト搥トフ」、一一に別(に)

15 論(せり)、又(た)云(く)、我レ説ク、▲此の人、能善ト抖ト搥ト(す)。是返(の)如き抖ト搥ト、取返(せ)不、捨返せ不、

16 修返(せ)不、着返(せ)不、我レ説ク、此の▲人は能(く)頭陀返を説(く)なりと、増一含(に)云(く)、其の毀シ

17 有(ら)は、十二頭陀の一一の行返を讀讀する者は、▲則(ち)「於」我返を「我於ニ」毀讀返するに爲(り)、
ぬ、我(れ)は常に此の法の此レ世返に住住するに由(るか)故(に)我(か)法も久(し)ク世返▲於ニ住住する

- と行するをも讚(す)「也」。十輪(に)云(く)、禁戒(返)を毀破するハ、頭陀(返)を失(ふ)なり、逆(返)を以(て)造(す)るを(も)て(の)故なり。我か滅に非ず、▲過去の佛(の)「之」所説(返)の「如(し)」、淨戒(返)を破(す)レ者「イ、破(する)者」衆(返)に入(待)「ら」不(す)、華手經(に)云(く)。迦葉は▲頭陀の苦行(返)を行(待)せし(こと)を(以(て)の故(に))。佛(の)所(返)に來(至)セリシに、如來、身(返)を移し座(返)を分(ち)て与(へ)タマヒキ、迦葉、辭(す)ヒ讓(す)テ▲受(け)不(り)き、雜含中には、佛(親)親(し)ク「イ、親(ら)」命(し)して半座(返)を以(て)手(テツカ)僧伽梨(返)を授(け)て、迦葉の着(返)たる所の大▲衣(返)に易(へ)タマフ、大衆(の)中(返)於(て)して頭陀の太行(返)を稱讚(し)タマヒテ、四分には佛(親)三(月)靜(親)「か)に坐しタマフに。唯し一の▲供養人(返)を除きタマヘリ、時に六十の頭陀(返)有(り)て佛(の)所(返)に往(至)する(と)「き)に佛(返)の爲に讚歎して佛(返)を供養しタテマツル▲人(返)と名(く)といふ、十住婆沙には、阿練若の比丘に十の利(返)を略説(し)き「イ、略説ス」、形(返)を盡(し)たり、捨(返)「つ)應(待)「から)不(と)いふ、一は、自▲在來去し。二(は)我我所(返)無き、三(は)意(返)に隨(ひ)て障(返)「する)こと無き、四(は)心(に)空(返)を樂(し)習(フ)處、五(は)住▲處に少欲少事するなり、六(は)身命(返)を惜(待)「ま)不(して)功德(返)を具(待)「する)こと(を)爲(す)る、七(は)遠(く)内語(返)を離(る)ること、八は功德(返)を▲行(待)「す)と雖(も)報恩(返)を求(待)「め)不(九(は)禪定(返)に隨順して一心(返)「を)得(待)易(き)、十には空處(返)於(待)處して無礙(ケ)の想(返)「を)生(待)「し)▲易(き)なり、若(し)因緣(返)有(ら)は塔寺(返)も入(待)「る)こと聽(す)、通(返)有(り)、局(返)有(り)、外▲道の形(返)を盡(し)たる空處(返)にアル二同(待)「し)から)不(廣)ク説(く)こと頭陀品の中(返)にイフ「か)如(し)、頭陀の名は聚落と空野(返)とに通(す)、▲蘭若は冢間とは定めて城邑(返)「を)出(て)たり、餘(の)「之)十の行は喧(し)きに「イ、喧(シ)靜(なる)にも通(して)行(す)へし。二に數(返)「を)列(ぬ)▲者(位)を分(ち)て四(と)爲(す)謂(く)衣(と)食(と)處(と)「及(威)儀(と)なり」也」。先(つ)出(て)て次第(返)「を)相(ひ)生(ず)る、後には一▲一(に)行(返)を列(ね)各(の)方法(返)を辯(す)、初の衣服中に者(たは)せ

- 48 物^返を須^ちて莊嚴^返（せ）不るか故なり。九^に八聖道^返に隨^ふか故^{なり}。十^に我[、]▲當に精進して道^返を行して染汚の心^返を以てスルコト、「於」須臾の間^返も（あら）不^す（と）いふなり、寶梁經には周那トイヒシ沙弥、糞掃衣^返を洗^スヒシに、諸天、汁^返を取^りて自^ら身^返を洗ヒキ、二^に者[、]三衣をイフ、四分には諸の▲長衣^返を捨^てて三衣^返を着よといは、論^に云^く、但^た三衣^返ノミ有^りて更に餘^の衣^返を畜^待（へ）不^ぬに十の利^返有^り、一には▲三衣^の外^返に於て、求受^{する}（る）無^き、二^には守護する疲苦^返無^き、三^には畜^返（ふる）所の物少^{なき}。四^には唯^し▲身に着^る（る）所ののみ足^返（り）ぬト爲^る、五^には細^戒の行アルなり。六^には行^來に累^返無^き、七^には身體輕便なる。八^には▲阿練若處^返に隨^ひて住する。九^には處處に住するに顧^ミ惜^返ムこと無^き、十^には道行^返に隨順するなり、
- 54 者^は、一には衆^返に在る因緣^返を以^ての故には。諸の惱害^返多し、二には僧祇の人▲民^返を鞭^打スルヲ以^て共に相^ヒ瞋^り惱^{マシ}、諸の非法^返多^くして、食^音清淨^返ナラ不^ぬ、三^には他の意^返を觀^待（す）る）を以て色心、安^返（から）▲不^す、四^には少欲知足にして四^聖種^返を修するなり、檀越の請^返を受^{くる}）も、亦^た過失^返有^る、請^の▲因緣^返を以て、先より僞^者更^に細^返に精^シ令^め、若^し少^き）をは多^返クをせよと勤^め、若^し味^返を兼^待（ね）たること無^きには、衆の饌^返を教増し、▲心に希望^返有^る）そ、即^ち少欲の聖種^の「之」法^返に非^ず、常に彼^レ、我^か得失^の「之」心^返を懷^けり、若^し▲乞食するに者[、]蕭然として繫^り無^く、意にも増減^返無^し、又^た衆食は盡^返（くる）こと有^り、乞食は窮^る）ことも無^し、▲佛、教^へて、弟子をして無盡^の法^返を修せしめタマフなり、四分に蘭若の比丘、村^返に入^りて乞食せむに者[、]清旦に▲淨^く手^返を洗^ひて、衣^柳の邊^に至^りて、一の手をもて衣^返を擧^げ、一の手^をもて挽^き取^りて、抖^擻して、七條^返

- 63 を着^キ▲已(り)て大衣^返を襟^ム、肩の上^ニ若(し)は盃の囊の中^返に着け、露^{ツユ}を打つ杖^返を執(り)て道^返に在(り)て行(ふ)に常^ニに善法^返を▲思惟(せ)よ、若(し)人^返を見(る)には、先づ問訊して善來と言(ふ)へし、若(し)聚(き)落^返に近(く)は、便(ち)大▲衣^返を着(る)に、「於(こゝ)村の門^ノ」に「村(の)門於(こゝ)」至(り)ては、巷相の空處の相。第一の門の相、第七の門の相^返を看(待)る)應(し)、右の▲手には、杖^返を捉り、左の手に盃^返を持(ち)て道の側より而も行(き)て次第(に)食^返を乞へ、若(し)俗人、食^返を送らば、迎(へ)て取^返(る)こと得(待)▲不、來^返レ(と)喚^フに往(き)て取^返(る)をは除く、強(ひ)て乞^返(ふ)ことを得(待)不、當に得^返「當(待)しと知(待)る)應(し)と者立(ち)て待(つ)に」▲食^返を得(り)ては作念して言(ふ)へし。此は賊^返の爲に此は自(ら)食せむか(ためなり)と。乃至村^返を出(て)て、盃^返を安(き)て、地^返に着(け)て、僧▲伽梨^返を襟(み)て、前の進不^返(の)如き、蘭若處^返に至(り)て方に共に之^返を食(す)へし(と)いふ、僧祇(に)云(く)、若(し)乞(は)む時には語(り)て我に食^返を与(ふる)ヒト大富を得むと云(ふ)こと▲得不、當に現なる處^返に在(り)て默然(と)して「而」立(て)レと、十誦には、乞食には三重の門^返に入(待)る)こと▲得庭の中^返に至(り)ては三匕彈指せり、便去^返す(る)こと得(待)不、食の時には先づ熟せる▲者^返を噉(ひ)て後(に)生(き)菜果等^返を噉(ふ)へし、十住に云(く)、乞食に十の利あり。所用の活命は自(ら)屬(して)他^返には▲屬(待)せ不、二(には)我に食^返を施する者三寶^返に住(待)せ)令(め)て、然して後に當食する、三には我に食^返を施する者は悲心^返を▲生(せむ)と(す)當し、四(には)佛教^返に順して行する。五(には)▲テ易ク養(ひ)易き、六(には)は橋慢^返を破る法^返を行する、七(には)▲無見頂の善根ナル。八(には)我か乞食^返するを見て餘の善法^返を修する者も我^返に効^フ、九(には)▲男子大小^返与(と)「与」男子大小と」諸の縁事^返有(待)ラ不、十(には)次第に乞食する時二三衆生の中^返に於て平等心起るなりと、▲善見に云(く)、分衛トイハ「者」乞食する「也」。僧祇には、迦

- 78 葉、願^返を發して乞食するに初めに得^返るいはは▲僧尼^返に施与して後^返に得^返む者をは自^返ら食せよ(と)いふ、
 79 智論には、佛、釋子^返を將^返て迦毘羅城^返を去^返ること五十里に▲住^返しめて、來往して、城^返に入^返りて乞食
 (せ)しめタマフ。皆^返な、竝^返(ひに)苦^返ムこと告げき、因^返りて寐^返不^返レハ、夜長き。疲極^返(り)ヌレは道長し、
 80 ▲愚なるハ生死長し(と)等^返イフ法^返を説^返(き)タマヒき(と)いふ、増一に云^返(く)、大目連、乞食として梵志^返
 81 の爲に圍^返マ所て瓦石もて▲打^返(た)れて骨肉、爛^返レ、爛^返レ盡^返(き)き、往業^返の爲の故なり、還て舍利弗^返に
 82 見^返エテ便^返(ち)滅度^返に入^返(ち)ムトスルニ、舍利▲弗は先^返(つ)滅度^返に入^返(り)き、患^返重^返き爲の故なり。三
 83 界の諸天の涙^返ヲ墮^返(す)こと雨^返の如し(とい)へり、故に知る、業は▲能^返(く)隨逐して聖^返に至^返り、免^返(れ)
 不、但^返(し)惣^返報^返惡業^返せむを斷^返(ち)て、別報をは亡^返(する)マテ(せ)不^返なり、
 84 ▲四^返(には)餘の食法^返を作^返(ら)不^返、多食して度^返無^返(き)は道業^返(を)妨^返(くる)に由^返(る)か「
 85 多食^返(して)度無^返(き)に由^返(り)て道業^返(を)妨^返(くる)か」故に、智論には、小▲食中食後食^返を求^返(む)るに由
 86 (り)て則^返(ち)半日(の)「之」功^返を失^返ず、佛法は道^返を行^返(する)か爲の故なり。▲身^返を益^返(せむ)か爲、
 87 馬^返を養^返ヒ猪^返を養^返(ふか)如^返くには(あら)不^返(さ)レ(と)等^返いふ、五^返(に)一坐食^返者論に云^返(く)、先
 88 求^返(む)る疲苦^返有^返(る)こと無^返き、二^返(には)受^返(くる)所^返に於て▲輕ク少^返き。三^返(には)用^返する所に
 89 疲苦^返有^返(る)こと無^返き、四^返(には)食の前に疲苦^返無^返き、五^返(には)細行の食法^返に入^返(せ)ヨ、▲六^返(には)
 90 食消して後に食する。七^返(には)妨^返け患^返(ふ)こと少^返き、八^返(には)疾病^返少^返き、九^返(には)身^返體輕便なる。十^返(に)
 91 は)身、快^返樂なるなり。智論に云^返(く)、人^返有^返(り)て一食^返すと雖とも「而」食心をもて極めて噉^返(は)腹^返
 脹^返レ氣^返妨^返け塞^返て道^返を行^返することを廢^返メ、故に節量食^返を受^返(く)へしと、三千^返(に)云^返(く)。數

- 92 數食還 すること得還 不、一食還 す應し、姪と▲怒と癡との結還 を長マして、俗人還 に異ら不待を以て
- 93 なり、六には一揣食。謂く數シヤク受け益するか故に。貪心則ち▲多し、今惣て益の中還に受け内イれて、取り
- 94 て足還るることを斟量シムして、更に益還をを受け不ぬなり、解脱道論には、節量▲食するを斷コトルコト、食還に於て
- 95 對治還▲有待るか如し、智論には節量一食者能ク食還するる所待に隨ひて、三分して一還を留むレは
- 96 則ち身輕くして▲安隱なり、消還易し患還無し、經の中に説くか如き、舍利弗の云く。我れ
- 97 若し食すること五口六口して、▲之還を足ス、水還を以てして、則ち身還を支サふるにも足すと、秦の人の
- 98 食還に於ては十口許還なる可し、
- 99 ▲七に阿蘭若處者。智論に、遠離處還と名つク、最も近きは三里なり。能ク遠き、益マ▲善し。餘の諸
- 100 の雜行は第六十八卷の中還の如し、四分の中に云く。空靜の處は村還を去ること▲五百弓に、弓の長き四肘
- 101 なり。中肘の量還を用せり「也」。則ち一肘は、長きは一尺八寸なり、六尺をもて▲歩として之還を積ツムて、便ち
- 102 若干の里還有り「也」。中國の僧一寺は竝ひに城の外還に在り、尼の寺は城の内にあり。▲十誦に云く、祇桓還
- 103 を繞りて虎吼ホユ、此の寺は舍衛城の南還を去ること千二百歩なり。薩婆▲多に云く、村還を去るこ
- 104 と一拘腰舎なり。《此には、一ノ鼓聲還と云ふ》謂く、蘭若閑靜の處音に、村の▲中の鼓の聲還を聞か
- 105 令待める不なりぬ、諸の坐禪の比丘還を亂ムするることを恐るるるなり、若し僧と衣との二種の蘭若は前に
- 106 明還か如し、僧▲祇には阿蘭若の比丘は聚落の比丘還を輕待むること得待不、言還を讚めて汝、聚落
- 107 の中に住して▲説法し教化して法還の爲に護還と作し我等還を覆一蔭とす應し、其の聚落の者も練▲若の比丘還
- 108 を輕み、汝も名利還を希望して禽獸還と同處にして朝還從り日還を竟ツツ、正しク▲歳還を數ふ可ハ

- カラハ云(ふ)こと得不(る)耳ミミ。讀めて言(返) (ふ)應し、汝、聚落(返)を遠(カク)ンて、閑靜の處(返)に在(り)て、上業(返)を思惟(す)ヘシ四五。「思惟して」、崇(トク)ム所、此、▲乃(し)行(返) (し)難き「之」處なり。能ク此(返)於住して「而」心意(返)を息ム(と)等(訓)イヘ。八(に)冢間坐(トク)下者、▲十住論に謂ク、死(トク)一人の間(返)に在(り)て住するに者、厭離の心(返)に隨順するか故なり。常(に)死人の間(返)に止宿するに十(の)利(返)有り、一は常に無常の想(返)を得る、二(は)死想(返)を得る、三(は)不淨の想を得る、四(は)一切世間、不可樂の想ナル、五(は)常に一切の所愛の人(返)を遠離(返)すること得(る)、六(は)常に悲(心) (返)を得る、七(は)戲調(返)を遠離する、八(は)心常に厭離ナル。九(は)勤めて精進(返)を行する、十(は)能ク怖畏(返)を除するなり、▲九(に)樹下坐(といは)は。智論に云(く)、樹下に於て思惟する「一、思惟す」佛の如きは生(れ)タマフ時七。成道し、法(返)を轉(し)、滅(返) (に)入(待) (る)まては皆(な)樹の下(返)に在(在)しき、行者、諸佛の法(返)に隨(ひ)て常に樹の下(返)に處(す)へしと、論に云(く)、樂(ひ)て覆地(返)に處(待) (せ)不に十(の)利(返)▲有り、謂(は)所(る)房舎と臥具と所愛と受用との疲苦(返)有(る)こと無(し)、及(ひ)四依の▲法(返)に隨(ひ)て得易クして過(返)無きなり、復(た)衆の内等(返)有(待) (る)こと無きなりと、十(に)露地(返)に在(る)に者。智論に云(く)。我(わ)レ樹下(返)を▲觀(る)に「一、觀レは」半舎(返)の如(く)して異(返)なること無し、蔭(覆) (にし)て涼(し)き樂(あり)又(た)愛着(返)を生し、便(ち)露(地) (返)を受(くる)なりと、日(光)に遍(照)して。空中明淨 (に)して空定(返)に入(待) (り)易しと、増一に云(く)、比丘、因縁和▲合して乃(ち)此の身(返)有り、骨、六百六十有り。毛孔、九萬九千。脈チクミチ 五百(返)有り、▲筋亦(た)五百なり。虫、八萬戸なり。當に常に思し學(返)は(しむ)「當再讀」し、最も空法(返)と名(つく)、善見には、若(し)▲上(音)頭陀の法(返)を受(け)は、樹の下(返)に在(レ)、若(し)空地に在(レ)、乃至袈裟(返)を以て屋(返)と爲(待) (る)こと得(待) 不(レ)、僧の臥具(返)を將て外(返)に在(り)て受用(返)すること得(待) ▲不(レ)、若(し)能ク愛護(し)て乃至袈裟ハカリといへ

124 覆(ひて)濕(返) (さ) 令(待) (め) ▲不して用(返) (る) こと得と、中の頭陀(返) を受(せ) む者、雨(返) 無き時に
 125 は露地にして、雨の時には屋の下にして僧の臥具を▲用(待) すること得と、論(に) 云(く)、十(の) 利(の) 故なり。一は樹
 126 下(返) を求(待) (め) 不、二は我所有(返) を遠離す、三は諍訟(返) 有(待) (る) こと▲無き、四は若(し) 餘に去す(る) に
 127 顧(カ) 惜(シ) (返) ムこと無し、五(は) 戲調(返) 少き、六(は) 能ク風雨、▲毒虫、寒熱(返) を忍(シ) フ、七(は) 音聲、荆棘(返) の
 128 爲に刺(サ) (返) 、所(待) 不、八(は) 衆生をして瞋恨(返) (せ) 令(待) (め) 不、▲九は自(ら) 亦(た) 愁恨(返) (する) こと
 129 有(待) (る) こと無き、十(は) 衆の内シキ「内」行處(返) 無きなり、如來は大畏林(返) に依(り) て、風雨に▲交(リ) 流
 130 中(返) に着け、或(とき) は屎尿及(以) (ひ) 土空(返) を▲加(ふる) に、終に意(返) (を) 不起して彼(返) に向(ふ) 云云。
 131 十一に隨坐者(待) ▲論(に) 云(く)。坐處(返) に得(待) する所(待) に隨(ひ) て他(を) して起(返) (さ) 令(待) (め) 不(と) い
 132 ふこと、十の利(返) 有(り)、一(には) 好き精舍(返) (を) 求(し) て▲住せむ(と) イフ疲(苦) 有(待) (る) こと無き、
 133 二(に) は好き臥具(返) を求(す) (る) 疲苦(返) 無(き)、三(には) 上座(返) を惱(待) (さ) 不、四(には) 下座を(して) 愁(惱) (せ) 令(待) (め) 不、▲五(には) 欲(返) 少き、六(には) 事(返) 少き、七(には) 趣二得(て) 「而」用(る) (る) へ
 134 し。八(には) 用(返) 少き(とき) 八則(ち) 務(返) 少き、九(には) 諍(ウ) 因(返) を起(待) (さ) 不、十(には) 他の所
 135 用(返) を奪(待) (は) 不(な) たり、十二に常に坐して臥(返) (さ) 不(と) いふ者、薩婆多(に) 云(く)。跏(▲) 趺坐(せ) (る)
 136 者は將に心(返) を正(ク) (する) 故なり。然も始(め) に身(返) を正(ク) (すること) 外道(返) に異(なる) 故なり、人
 137 に信心(返) を生(せ) しむ(る) 故なり。三▲乘の人は竝に皆(な) 此の坐(返) を以て道(返) を悟す、解脱道論(に) 云(く)。
 138 夜は常に臥(訓) (さ) 不と「也」。▲決定王經の中(返) の如(く)、四の法(返) 有(り)、一(には) 乃至彈指の頃(も) 衆生の
 中(返) に於て心(返) を瞋(す) (ること) 生(さ) 不、二(には) 一時の頃(返) を与(へ) て、睡眠して心(返) を覆(待) (は)

139 使^待 (む) 應^待 (から) 不^ぬ、三 (には) 衆生^返 を引導して阿練若功德^返 を▲得^待 使^待 (め) よ、四 (には) 晝夜に念
 佛^返 を離^待 (れ) 不^ぬなり、餘は論に説^返 (く) か如し 住十論に▲十利^返 を説かク、一 (には) 身の樂^返 を食^待 (ら)
 140 不^ぬ、二 (には) 睡眠の樂^返 を食^待 (ら) 不^ぬ、三 (には) 臥具の樂^返 を食^待 (ら) 不^ぬ、四 (には) ▲臥^訓 (せる) 時に脇
 141 不^ぬ、二 (には) 睡眠の樂^返 を食^待 (ら) 不^ぬ、三 (には) 臥具の樂^返 を食^待 (ら) 不^ぬ、四 (には) ▲臥^訓 (せる) 時に脇
 142 は) 經^返 を讀^待 誦^待 (し) 易し、▲八 (には) 睡眠^返 少き、九 (には) 身輕^く して起^返 (き) 易き、十 (には) 坐
 143 臥具衣服^返 を求^待 (す) と、心薄^クきなり、四分の中には、▲蘭若の比丘、好き臥具^返 を敷き安^クに眠^待 (れ) は、佛の言^く
 144 尔^返 (る) 應^待 (から) 不^ぬ、初夜後夜には、意^返 を▲警^メて思惟^返 す應^待し、爲^せる所の出家は出要^返 を存^待す
 145 るか爲なり、觀行の法は後に説^返 (く) か如し、智論に▲云^く、身の四威儀は坐を第一^返 と爲^せ、食、消化^返 を易くし、
 146 氣息調和なり。道^返 を求^待 (む) る者^ト▲大事、辨^意 (せ) 未^レは、煩惱の賤い常に其の便^返 を伺^フ、宜ク安に臥^返 (す)
 147 「宜^待 (再讀) (から) 不^ぬ、若^し (し) 睡^返 (らむ) と欲^せむ時には脇を席^{キヤ}に著^待 (け) ▲不^ぬ「い、不^レ」、三 (には) 諸部
 148 異行をいふ。毘尼母の中に云^く。若^し (し) 瞋^心止^返 マ不^レは、我^音▲則^ち食^返 せ不^レ、瞋い滅^返 するを待^待 (ち)
 149 て方に食せむと。智論には中後には漿^返 を飲^待 マ不^レ、此の緣^返 に由^る (る) か故に心に▲樂着^返 を生して其の心^返
 150 を一にして善法^返 を修習^待 (せ) 不^ぬと、寶雲經に、四^分には「之^一」を食せよ、凡^そ食^返 を乞^待 (ひ) 得^待 ▲分^ち
 151 て四分^返 に爲^して一分は同一禁行者^返 に与^へ、第二の分をは窮下の乞^カ (の) 「之^一」者^返 に与^へ、▲第三の分をは、諸の
 152 鬼神^返 に与^へ (へ) よ、第四の分をは自^ミ (ら) の身^返 に供して食せよ。但^し (し) 道^返 を修^待 せむと念^へ、食の▲中^返
 153 於^には「い、[於^に] 中に」貪染の心^返 を生^待 (せ) 不^レ (れ)、若^し (し) 乞食の時には、念を威儀^返 に繋けて、終に輕^ク躁^返
 154 ラ不^レ、諦に▲目の前^返 を視、一尋^返 を過^待 (さ) 不^レ、次第^に之^返 を乞^へ、惡^し (し) き荷^トと、惡^し (し) き牛と、
 先に禁戒^返 を破^待 (破) ラレタラム^を 除^け、隨^ひて人畜の能^ク擾惱^返 する^{こと} ▲有^ら者^ハ「い、有^ラハ」者^一」。

無き▲水の中にして。餘の諸の食具をは、淨ク洗(ひ)て、本の處(返)に復(し)、食せむ地(返)をは、淨ク掃へ、賊來(返)
 (る)こと有ラ者、▲語(り)て言(ふ)へし。此(は)是レ水なり。此(は)是レ食なり。汝等(返)か爲の故に、別に淨潔(返)を
 留(め)たり、若(し)食(返)せむ(と)欲(す)ハ、便(ち)之(返)を▲食(せ)む、善ク夜の時節及(ひ)以(ひ)方(相星の
 名(返)を知(待)る)須し、賊(來)りて問(答)せむ(に)失(返)有(待)る)こと(を)恐(る)る)なりき、▲十誦には、練
 若(に)して星經(返)を讀(待)む)ことを開(せ)り、若(し)人來(返)る)と見は先つ共に語(り)て顔(色(返)を和悦せ
 よ、頭(返)を▲垂(下)ル應(待)から)不(正)し)ク憶念(返)す應し、餘は四分(返)の如し、四分(には)鑽(木(返)を)
 用(る)て火(返)出(待)す)こと開(せ)り、屏(き)たる處(返)に在(り)て、▲亦(た)火珠(返)を用(る)ること
 開(せ)り、善見には若(し)頭陀の比丘は寺の中(返)に住(待)す)と雖とも僧房(返)には住(待)せ)不(レ)住(せ)不(レ)、
 衆の食(返)を▲食(せ)不(レ)、施主自(ら)房(を)起(テ)しか爲に、僧(言)差(シ)て知事(返)と爲(待)ること得(待)不(レ)、若(し)
 比丘、能(返)有(り)て、▲讀誦し教化說法して、能ク僧(返)を利する者(アリ)トモ、亦(た)差(し)て知事(返)と爲(待)ること
 得(待)不(れ)、好(き)房(舎)、衣(▲盜)をは先(つ)之(返)を与(へ)よ、飲(食)果(木)をも分(返)を加(へ)て与(返)ふ)ること得(へ)し(と)
 いふ、五分(には)、若(し)十二頭陀の法(返)を捨(待)て)不(し)て、人間(返)に▲在(り)て、請(返)を受(せ)は一
 に吉羅(なり)若(し)能(返)フ不(ク)者、皆(な)、頭陀の法(返)を捨(待)つ)應(し)と)、
 ▲僧(と)像(と)に敬(返)を致(す)篇第廿二 井造立像 寺法附
 ▲法軌(を)時(返)に被(ム)レは、景仰、斯(に)立(つ)、謙(恭)して敬(返)を斂(す)れは俗(礼)章(返)に命(せ)り、遜(悋)儀(返)を攝(め)て、
 ▲道宗(爰)に始(ま)る。豈(に)形(服)標(異)返(を)以(て)「而」倨(慢)して無(知)返(を)得(む)や、良(に)敬(返)を致(す)
 方(返)▲有(待)る)に由(り)て、故(れ)能(く)清(革)する)耳。故(に)増(一)に云(く)、慙(愧)二法(返)有(る)を)も
 て世(返)に住(し)て則(ち)相(ひ)恭(敬)す。是(の)故(に)、比(丘)勤(め)て共(に)學(返)ふ)當(し)、比(時)移(り)て

- 185 情淡(くし)て礼義レ云二亡一す。鄙末(の)「之」小僧、妄(に)衆首返に參り、眉壽(の)「之」大徳、奄オチマシ二下行返に就(く)こと、武力を智▲能▲と爲レ、文華を指(し)て英彦と爲レるを以(て)なり、斯(く)の如(き)冒罔、熟(れ)か言返ふ可レむ哉。故(に)輒(ち)略提引(して)▲永(く)明誠返を成す、中(に)就(きて)二(に)分(ちて)題(の)如(く)明返す所、初中(を)三(に)分(つ)、一(は)相敬の意返を制す、二(は)敬返に▲對(し)縁返を立(てて)合一不兩の相をいふ、三(は)敬返を立(つ)る儀式なり、初中(は)智論(に)云(く)。諸▲佛は生身返を以(て)礼敬爲不「也」。若(し)法身返を以(て)是を供養返と名(つ)く、佛(の)如(く)に切▲利天從(り)下(り)しトキ、須菩提、石筵中(に)在(り)て、無常空返を觀(する)故(に)先つ佛(を)見レテマツラ(む)と爲レ蓮▲華色尼は寶階にして、先つ佛返を禮(す)れとも之(を)受(け)不レ相敬(する)所一以者慢法返を除レかむか爲(の)故(なり)▲四分(の)中(には)諸比丘、大小返を知レら不レるに由(る)か故(なり)。佛、呵責(し)已(り)て告(け)て言く、汝、誰か第一の座。第一の水。第一の食。乃至起迎。193 194 礼拜。恭敬。問訊返を受(く)▲應しと謂おふ▲邪オヤ。諸比丘の言(ふ)こと各(の)不定なり。或(は)云(く)。十二頭陀(の)者なり。大姓なり。多聞なり。法師なり。持▲律なり。禪師なり。と(の)等くいふ。佛、言く、汝等、各各(の)慢返を長(する)か故(なり)。是(の)語返を作(して)廣(く)三の鳥獸の▲相(ひ)恭敬する法返を説(き)て便(ち)偈返を説(きて)言(く)。其(れ)長老返を敬(せ)は「者」。是(の)人、能(く)法返を護(り)現世には名譽返▲有(り)、將來に善道返を生(す)、人民返を教化して皆(な)法訓返に隨(ふ)へし、汝等、我か▲法律(の)中返に於て出家して更(に)佛法返を相(ひ)恭敬して流布返すること得レ可(し)、自今已去は徳▲長幼返に隨(ひ)礼拜し、上座をは迎送し問訊返すること恭敬(せ)よ、大悲(に)云(く)。佛、過去時に若(し)▲三寶。舍利。塔像。師僧。父母。兄弟。姉妹。耆年。善友。外道。▲諸仙。沙門。婆羅門等返を見タマヒしに傾側し謙下し禮敬(せ)

- 219 (を)合しき、律中小沙弥尼は大沙弥尼還 (を)礼せよ、是(の)如(く)展轉して乃至如▲來及(ひ)塔までせよ、餘(は)後(に)説還 (くか)如(し)、四分(には)十種非威儀をは礼還 (す)應(から)不、大小行と裸▲身と、若(し)は剃髮と、若(し)は説法と、楊枝還 (を)嚼(む)と、口還 (を)洗(ふ)と、若(し)は飲(む)と、若(し)は食(ふ)と、若(し)は果還 (を)噉(ふ)となり、▲増一(に)云(く)、塔中にしては礼還 (す)應(から)不、五分には相瞋と、屏處とに礼(する)こと得還 不(れ)といふ、十誦(には)睡と縫▲衣と大衆の中と路還 (に)在(り)て行せむと病時とをは礼還 (すること)得(不)れ、僧祇泥を作り、衣還 (を)洗(ひ)、▲及(ひ)手足をを洗浴し、一衣還 (を)着タラム時、疾く行(か)むか等きをは礼還 (す)應(から)不、十誦(には)佛の塔、聲聞の塔の▲前には自他互(に)礼還 (すること)得(不)五、五百問(に)云(く)、佛塔の前にして比丘還 (を)礼するハ、墮還 (を)犯(す)、僧祇(には)塔還 (を)▲礼し、經還 (を)誦(し)、經還 (を)讀(み)、經還 (を)寫(し)、經還 (を)授(け)、闇中にしては竝(に)礼還 (すること)得(不)といふ、皆(な)謂(く)別(に)▲敬還 (する)所有(るか)故(に)と)いふ「也」。三(には)敬還 (を)立(する)儀式。三還 (に)分(つ)、初(に)佛還 (を)敬(する)法。二(に)僧還 (を)敬(する)法。三(に)▲大小、礼還 (を)致す法なり。初中佛塔還 (を)敬(する)法といは、若(し)は塔廟と支提と受用之物と乃▲至殿堂、牀座還 (に)造(せ)むと擬(す)材石等、已に佛像の受用還 (に)經(たる)者(を)は縱(使)風(に)吹(か)れ、雨(に)破(れ)タリとも、當(に)之還 (を)奉敬還 (す)「當(に)當(に)再讀(し)」。形像還 (の)如(く)、異還 (なる)こと無(き)か)故(なり)。四分(の)中(に)王、園還 (を)以(て)佛還 (に)施せしに、▲佛、受還 (け)タマハ不(して、當(に)僧還 (に)奉(侍)ケ令(め)たり、何(を)以(て)の)故(に、若(し)是(の)佛の園及(ひ)園の物。房舎。房▲舎の物。衣鉢、坐具、鍼筒は便(ち)是、塔廟なり。一切の諸天、世人の沙門、魔▲梵の受用還 (すること)能(へ)不、恭敬還 (す)應(き)こと塔還 (の)如(し)、《若(し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

233 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

232 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

231 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

230 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

229 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

227 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

228 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

226 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

225 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

224 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

223 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

222 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

221 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

220 (し)僧還 (に)施(き)者(を)我、僧中還 (に)在(り)》▲増一(に)云(く)、諸比丘還 (に)告(く)、▲佛還 (を)

234 235 礼して承事するに五(の) 功德還 有(り)、一者端正(なり)。佛像還 を見て歡喜心還 を發得 (するを) 以(てする) なり、二▲者好聲還 (なり)。形像還 を見て三(た) 比自還 (ら) 号還 を稱(し)て、南無如來無所著至眞等▲正覺還 (と) いふに由(る) なり、三(は) 財報(の) 多(き) なり、華香還 (を) 以(て) 供施するに由(るか) 故(なり)。四(は) 長者 (の) 家に生(る)。形(を) 見▲已(り)て、心(に) 染着還 無(く) して志心礼還 するに由(るか) 故(なり)。五(は) 命終(りて) 天(に) 生(る)。此、即(ち) 諸佛の常の法なり、當に是還 (の) ▲如(く) 學す「當再讀」(し)。智論(に) は) 法還 (を) 礼(するに) 三還 有(り)、一者口をもて礼する。二(は) 膝還 (を) 屈(め)て頭を▲地還 に至得 (さ) 不(る)、三(は) 頭を地還 に至(して)て、是を上礼還 (と) 爲、地持には、當(に) 五輪、地還 (に) 至(し)て礼還 を作得 (す)「當再讀」(し)、阿含(に) 云(く)、▲二の肘、二の膝、頂を五輪還 (と) 名(づく)「也」。亦(た) 云(く)、五體を地還 (に) 投(くるに) 是、先(つ) 正立(し) 已(り)て掌還 (を) 合(せ)て、▲右の手に衣還 を裹(て)、二 (の) 膝還 を屈(め)て、已(り)て次(に) 兩肘還 を屈(め)て、手還 (を) 以(て) 足還 を承(け)て、然(し) て後に頂礼して、後に▲起(ち)て、先(つ) 頭還 を頂(して)、次に肘、次(に) 膝を以(て) 次第還 と爲よ、《相/亂 (せ) 不[也]》智論(に) 云(く)、若(し) 諸佛(の) 功▲德還 (を) 聞(きて)て、心に敬(じ)、尊重し、恭敬し、讚歎して、一切衆生の中に徳、過上還 無得 (し)と知(る) 故(に)。▲尊還 と言(ふ)「也」。敬畏(の)「之」心。父母、師長、 君主還 於得 過(き)たり、利益、重(き) 故(なり)。故(に) 重還 (と) 云(ふ) ▲「也」。謙遜して畏(り) 難 (き) 故(に)。恭還 (と) 云(ふ)、其(の) 智徳還 (を) 推(す) 故(に)。敬還 (と) 云(ふ)、其(の) 功德還 (を) 美(するを) 讚還 と爲、之還 (を) 讚(すること) 足還 (ら) 不(して)、又(た) 之還 (を) 稱揚するを歎還 (と) 爲、 又(た) 云(く)、佛の福田還 に殖(う)と者、殖といは謂(く) ▲心還 (を) 專(ら)に して堅着(するなり)「也」。隨 (ひ)て、一善還 (を) 以(て) 礼誦し、香華等をもて佛還 (に) 至(し)て盡還 (すこと) 無(かれ)、智、勝還 (り)

- 247 たるに由(るか)▲故(に)。毘尼母、革履(返)を(着(き)て塔(返)に)入(り)、塔(返)を(遶(めぐ)ること)得(不(れ)、
 富羅して塔(返)に)入(待)ること)得(待)不(といは「者」「不(とい)者」)▲彼(の)土(の)諸(の)人(者)は皆(な)、慢
 心(返)を(起す故(に)、着(返)く)こと聽(待)さ)不(、寒雪多き處には、▲靴と富羅(返)とを着(返)く)こと聽(す)、
 三千(に)云(く)。塔(返)を(遶(る)五法、一(は)頭(返)を(低(れ)て佛(返)を(視(る)、二(は)虫(返)を(踏(待)
 不(む)こと)得(待)不(、三(は)左右に視(返)ること)得(▲不(、四(は)地(返)に唾(待)せ)不(、五(は)人(返)与(語
 八不。又(た)當(に)佛恩の大(に)して▲報(返)し)難(待)き)こと)念(し、佛の智慧(返)を(念(ひ)、佛(の)經
 戒(返)を(念(ひ)、佛(の)功德(返)を(念(ひ)、佛の精進、乃至▲泥洹(返)を(念(ふ)へし、又(た)僧(の)恩、
 師(の)恩、父母(の)恩、同學(の)恩(返)を(念(へ、又(た)一切(の)人(を)皆(な)解脱し、苦(返)を(離(待)れ)
 ▲使(待)めむと念(へ)、又(た)惠(返)を(學(して其(の)三毒(返)を(除(き、出要道(返)を(求(待)めむこと)念(へ)、
 253 塔の上の▲草(返)を見ては手(を)もて之(返)を(去(れは、捉(り)て拔(返)く)こと)得(待)不(れ)、不淨(返)有(ら)
 254 は、即(ち)之(返)を(分(け)除(へ、若(し)天、雨(る)には當(に)▲履(を)塔(の)下(返)に脱(き)て乃至上(り)
 255 て佛(返)を礼(し)タテマツルへし、五百問(に)云(く)。比丘、塔(返)を(遶(ら)むに女衆隨者(は)得(返)▲不(れ、優婆
 256 塞(返)有(ら)は犯(返)さ)不(れ)、大論(には)如法に供養する法(は)必(す)右に遶(返)る)應(し)、▲賢愚(に)、舍利
 257 弗、佛(返)に辭(し)て膝行して遶(る)こと百巾しき「也」。善見(に)云(く)。佛(返)に)辭(する法(は)▲佛(返)を(遶
 258 る)こと)三巾して四方に礼(返)を(作(し)て「而(去(れ。十指爪掌(返)を(合(せ手(返)を(又(へ)頂上(返)に於(て却(き行(し)
 259 て▲絶(え)て如來(返)を(見(待)不(、更(に)復(し)て礼(返)を(作(し)て廻(り前(み)て「而(去(れ。雜合(に)云
 260 (く)。惰陳如久、佛(返)を(見(待)不(して後、來(り)て便(ち)面(返)を(以(て佛足の上(返)を(掩(ひ)て礼(返)を
 261 致(し)き二(に)正(しく)相(返)を(明(す)者(は)佛▲像(經(に)、教(は)住持の靈儀なり。竝(に)是(れ)我(等)か尊敬(返)す

262 所の則至真と齊(し)く觀せよ。今▲流俗の僧尼、多(く)佛法(を)奉(待)ら不、竝(に)愚にして網(返)に教
 263 (へ)内に正信(返)無く、見(る)に高遠(返)ならずして、大節(返)を虧(待)ルことを▲致す、或は形像(の)「之」前(返)
 264 (に)在(り)て更(に)相(ひ)戲(拵)して非法の語(返)を出(す)、目(返)を(を)擧(げ)げ(返)を擡(て)遍(に)聖儀(返)
 265 を指す、或は端坐(倨)傲して情、畏憚(返)すること無し、經像(返)を見(待)る(と雖も)起(ち)て▲迎(奉)返(せ)不、
 266 俗人をして輕笑し正法(返)を損滅(返)せ令(待)むること致(す)か故に。僧祇の中(に)人(を)礼(す)るに、▲「於」
 267 佛法(返)に對すること得(待)不、乃至幡蓋(返)を懸施(せ)むに像(返)を踏(待)むこと得(待)不、別(に)梯橙(返)を
 268 施す、此の文(返)を以(て)證(明)するに敬(處)別(なり)といふことを、既(に)知(り)ぬ、多(過)彌(よ)大に慎(返)
 (む)須し、堂殿塔廟(返)に至(り)ては水(返)を履(み)て▲深(き)に臨(待)む(か)如(し)、形像經教(返)を
 269 觀ては必(す)攝(然)として敬(返)を加(ふ)、此、則(ち)道俗通(し)て奉法(返)を知らるなり、賢聖、其(の)信
 270 心(返)を達(し)て且(つ)王臣(返)に對(するか)如きスラ長事(返)を令(む)亦(た)會(待)又可し、凡情、
 271 聖▲法(返)に任(待)せ難(し)、比(の)世の中(返)に遵(待)ふ宜(し)、多く下牀の上に在(り)て佛(返)を礼
 する者(返)有り、此、全く措摸(返)すること無(し)、▲人(返)を敬(ひ)、尚(ほ)自(ら)責(返)を被る、佛(返)を敬
 (ふ)に、自心に慢(返)を存せむや、心に道(返)を存(待)すること有(る)者(は)必(す)、之(返)を行(待)せ不れ、
 272 余(の)親、天竺の諸僧(返)に問(ふ)、諸國に此の法(返)有(待)ること無し、此(の)方(返)に來(り)て見(る)
 273 といへり、又(た)三千威儀(に)▲云(く)。自(ら)は高き處(返)に在(り)、及(ひ)上座は前(返)に在(る)に、自(ら)
 274 は後(返)に於(て)礼(返)を作る、亦(た)座の上にして▲礼(返)を作(待)ること得(待)不、十誦に香爐、伎樂(返)を持
 275 (し)て、僧と佛との前(返)に在(り)て行(ふ)こと聽(す)。和上の信(返)を傳(待)ふる(か爲)そ、和上(返)に▲代(り)
 て、礼(返)すること得、佛(返)に對(し)て跏趺坐(返)すること得、僧祇(に)云(く)。樂(返)を作(り)て、佛(返)

291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276
 に供するに、欲心着返すること有らは▲即ち須く捨て去れ。欲人華返を情結し、香返を破り
 て、佛返に供せ者は、餘の一切不合を得*。大▲論と持世經とに並に云く。衆生返の爲の故に、身返
 を碎くこと麻米返の如く、又た芥子返の如くシタマフ、衆▲生をして恭敬返せ令むるか故な
 り。涅槃返に入待ること得タマフ、僧祇には、佛の生日、乃至涅槃の日、大衆返の爲に▲説法し。佛徳返を
 稱揚すといふ、薩婆多に云く。二月の八日に、佛返と成りたまふ、亦た此の日返を以て生れ
 タマフ。▲八月の八日に法輪返を轉しタマフ、亦た此の日返を以て涅槃返を取りたまふ、若し
 瑞應等の經返に依らは、▲多く云く。四月八日に生れタマフ。涅槃、初には。二月十五日、涅槃返に
 臨待タマフと云ふ、後には▲十仙返を度して云く、三月返を過き已りて涅槃返に入りたまふ
 といへり、月徳太子經には。八月の十五日に▲滅返に入りたまふといへり、此、並に衆生の見聞の不同返に由る
 か故に。時節、等返しから未るなり、智論に云く。王舎▲城に十二億の家あり。舍婆提城には九億の家
 あり。尚ほ三億、見、或は聞く、慢業返に由るか故なり。佛世、猶ほ尔なり。何に況や末
 法轉して輕心の業、最も重きや。四分に云く、何そ▲正法の久しく住返すること知待る
 こと得む、佛の言く。若し比丘、佛法僧戒返を敬はは、是返を以ての故に。正法、滅返せ不し
 上返に▲反かへれば、則ち滅しぬ、次に僧を敬する法返を明す、若し衆主、是、和上闍梨に
 して、隨徒▲並に是れ弟子ナラ者は、縦七十人廿人返有りとも、立ちて、奉敬せ者は、亦た違返ふこと
 有待ること無し、傳に▲云く。佛、僧の來返を見て、便ち立ちタマハむとせ者は、此、正教返
 無し、若し師僧、僧殘已下の罪返を犯せらむ▲者は。必す別住返を行待せむと欲は、佛、弟子返を制して、
 經一理し、亦た須く恭敬礼拜返す「須再讀し、僧返の爲に▲礼返を設くるなり、弟子返

292 (を) 礼(する) には非(す)、是(の) 如(きは) /之(を) 例(とす) 》、次(に) 大小の礼(を) 設(くる) 法(を) 明(す)、毘尼母に云く。吾、世(を) 去(り) て▲後には、當(に) 波羅提木叉(に) 依(る) 當(再禮) (し)、行法、當に各各(の) 謙(卑) して「ハクク謙卑リテ」之(を) 行(せ) せよ、橋慢(を) 除去して心を淨法(に) ▲安せよ、下座は上座(を) 稱(し) て尊者(と) 爲(し)、上座は下座(を) 稱(し) て惠命(と) 爲(よ)、四(分) 分(は)、五衆の相礼い如來と「及」塔とをは通(し) て礼(せ) よ、初には小沙弥尼は大沙弥尼と▲沙弥と式叉と比丘尼と比丘と如來と「及」六の塔(を) とを礼(せ) よ、二に(は) 小沙弥は大沙弥尼と沙弥と乃至如來及(ひ) 六の塔(を) とをは礼(す) へし、三には小式叉摩那は大式叉と乃▲至如來及(ひ) 四の塔(を) を礼(す) へし、四には小尼は大尼と比丘と如來との三人と三の塔(を) を礼(す) へし、五(には) ▲小比丘(は) 大比丘と「及」如來との二人及(ひ) 二(の) 塔(を) を礼(す) へし、五百問(に) 云(く)、師(の) 冢(を) を礼(する) と得(還) (り) て自問(し) て曰(く)、生(き) し時は是、師なり、死(し) ては枯骨(と) 成(り) ぬ、何(に) 由(り) てか向(ひ) て礼(せむ)。答(ふ)、佛、在世の時には▲應(に) 供養(を) 須(す) 須(待) (し)、泥洹(し) 已(り) ぬれば、亦(た) 是、枯骨なり。師も亦(た) 是(の) 如(し)、須(く) 恩(を) 報(する) 故(に)。▲塚(を) 礼(すること) 得(也)。死屍の葬(せ) 未(る) に、義(を) もて准(し) て之(を) を礼(せ) よ、四分に、沙弥は當に生年(を) を以て次第(と) 爲(す) ▲若(し) 生年等(し) く者(は) 出家の年(を) を以て次第(と) 爲(應) (し)、問(ふ)、沙弥、大沙弥▲尼(を) を礼(すること) 得(す)、男女位別なり。今、礼(すること) 許(さ) 者(は) 答(ふ)、非(と) といふこと莫(し)、未(た) 具(の) 惣名(にして、勝徳として▲彰(す) 可(待) きこと無く、又(た) 師攝(に) 非(す)、但(し) 向(ひ) て礼(し)、屍塚(に) 及(り) 以(て) 禮(すること) 得(む) 「也」。四分(に) 云(く)、上座(の) 前(に至) (り) ては、革履(を) ▲脱(き) て、偏(に) 右肩(を) 祖(き) て掌(を) 合(せ) て、手に兩足(を) を執(へ) て云(へ)。和南(義) (に) 云(く) /我(を) 度(す) 》而(て) 礼(を) 作(す) ▲「也」。出要律儀(に) 云(く)、和南者(は) 恭敬(を) 爲(す) 「也」。聲論に云(く)。槃那寐、此に番

- 307 (し)て▲礼返を爲す(す)、五分には、若し人多くは、但た、別して師返を礼し、惣して餘人返(を)礼して
 308 「而に去る(る)。中含に云く、俗▲人の家返に至り(り)ては、先づ坐し(し)已り(り)て後に礼敬返を設け
 309 よ、餘は廣く。彼の恭敬經に説返(ける)か如し(し)、毘尼母に云く。無夏返▲從り(り)九夏返(に)至
 310 (る)まては是、下座なり。十夏より十九夏返に至る(る)まてを中座返と名づく、廿夏より卅九夏返(に)▲至
 311 (る)まてを上座返と名づく、五十夏より已去は、一切の沙門、國王の「之に尊▲敬返(する)所、是、耆舊長老な
 312 り」といふ。僧祇に無歳の比丘は三歳返と共に坐返すること得よ(よ)、乃至七歳は十歳返(と)共に坐返すること
 ▲得よ(よ)、若し臥し牀ならは、三人坐返すること得よ(よ)、坐牀ならは二人坐す。長さ一肘半牀には、三歳返に
 ▲相ひ降して二人共に坐返すること得よ(よ)、若し減併ならは上座返に与へよ。若し臥牀、三
 肘返に過せるならは、四歳返に降して共に坐返すること▲得よ(よ)、若し減せば得返不れ、若し
 大集會牀座少くは牀返を連ね接▲繫返(する)こと得よ(よ)、動返(か)令待使むること勿れ、同坐返(す
 315 る)こと得よ(よ)、若し方蔭の長さ三肘ならは四歳返(と)共に坐返(すること)得よ(よ)、減せ者得▲不
 316 (れ)、若し草返を散敷して地に共坐返(する)に罪返無しといは、伽論に云く、地に敷くに未
 317 受具▲人返と共に坐返(すること)得よ(よ)。薩婆多には長牀の相ひ接くは但た席返(を)異なら令めて蔭
 318 (を)異にす。槃を異にす。中空各の異返(なる)こと▲絶工令めて女人与坐返(すること)得むと
 319 いへり、僧祇に人の礼拜返を受くるには唾羊返の如くして語返(ら)不得(ること)得得不、▲當に相
 320 (ひ)問訊返(す)「當再」(し)、病惱返は少きや、安樂なりや不や、道路に疲苦返(せ)不るや、(との)等
 321 くイフ、上座返(と)共に語返(る)には亦た惠命返と云得(ふ)こと▲得む、二に造佛像塔寺の法返
 322 を明す、初には佛像返(を)造る法返を明す、▲意者は如來、世返に出るに二益返有り、一には現

在の生身に法（返）を説（待）（か）むか爲（なり）、二（には）未來に經▲像を流布して諸の衆生をして弥勒佛（返）のミ（もと）に於て法（返）を聞（待）（き）悟解し超昇し離生（返）（せ）令め（む）となり、此は大▲意（なり）「也」。後生（に）像（返）（を）造（る）に表彰（返）する所（待）無（待）か（ら）むと恐（る）故（なり）。目連、躬（ら）匠工（返）を將て天（返）に上（り）

此（の）像、地（に）垂（り）て世尊（返）を來迎（し）タマヒき、▲命（して）曰（く）汝、來世（返）於廣（く）佛事（返）を作（ら）む、因（り）て勅（返）を垂（り）て云（く）我、滅度後には形▲像（を）造立して一、佛（返）に似て見む者をして法

具（せし）めむ、是（返）（の）如（く）造立する、是れ佛像の體なり、▲此（の）像は中國の僧、漢（の）地に將て來（り）しに諸國、許（返）（さ）不して各（の）愛護して出境（返）（せ）令（待）（め）不（り）き、王、本（返）に依（り）て之（返）を寫し留（待）（め）令（め）て後（に）傳（ふ）る者乃至、四（ひ）彼の本（返）（を）寫（さ）令（め）て、今、楊州（の）長

樂寺（返）に在（り）、亦（た）龍光瑞像（返）と云（ふ）是（なり）「也」。▲今（の）人、情（返）に隨（ひ）て「而」造（り）て各（の）奇薄（返）を生して、本の實（返）を追（待）（は）不、競（ひ）て世染（返）に封せり、所以（に）中國より傳（は）れる像の嶺東（返）に在（待）（る）者、竝（に）皆（な）風骨、到壯（にして）儀肅（にして）隆重なり。神▲瑞（返）を發（待）

作（る）なりと云（り）。今、京師（返）に在（り）て、大（に）靈相（返）（を）發（す）「于」漢（の）世（に）速（ふ）まて仿髣として▲眞（返）に入（り）き、之を晉と宋（返）とに流（へ）て、頗（た）皆（な）實（返）に近し、竝（に）敬心殷重

にして、意、景仰（返）を存（待）（する）に由（る）なり、▲聖の模様（返）に准（ひ）て、故（に）造（る）所、靈異な

335 せる、但(し)尺寸(の)抐長(を)問(ひ)て、耳目全(く)具(し)たることを論(せ)不(或)は價(の)
336 利(鈍)を争(じ)、供(の)厚薄(を)計(り)て、酒肉賞遺(し)食姪俗務(して)身に潔淨(無(し)、心は唯(た)利(に)▲涉

る、尊像、樹(つと)雖(も)復(た)威靈(無(待)から)使(むる)こと(を)致(す)、菩薩(の)立形(は、姪女(の)

337 ▲「之」像(に)譬類(し)、金剛(の)顯貌(は、逾(妒)婦(の)「之」儀(に)等(し)く、乃至(經)卷(を)抄寫(する)には、唯

338 (た)務(賤)して、弱筆(麈)紙(を)得(惡)匠(鄙)養(し)、前(の)工(敬(ふ)こと無く、自心(に)▲慢(有(待)ら)使(む

339 る)こと致(す)、彼此(通)賤(して、法儀(滅)しぬ「矣」。經(像、世(を)訓(し)て、諸信(の)首(爲(待)ラ令(待)めむ)こと

致(す)、反(り)て自(ら)威靈(を)▲輕侮(すること、焉(そ)在(ら)む。故(に)偷盜(して)毀壞(し、私竊(治)鑿(して)經(を)

て、現在(未)來(に)無量(の)苦(を)受(く)、▲皆(な)失法(の)「之」所致(に)由(り)て(なり)「也」。若(し)

340 道俗(に)法(存(待)ら)使(めて、造(り、眞儀(を)得(つ)れハ、鳥獸(ス)ラ敢(て)汚踐(せ)▲不(何(に)況(や)人(を)

平(近)見(れ)は、有(る)賊、瑞像(を)劫盜(せ)むとして、纒(に)佛殿(に)入(る)に、便(ち)忽(ち)迷(悶)して所

趣(を)知(る)こと(莫(し)、曉(に)至(り)て)寺僧(恠(み)て問(ふ)に、久(く)して「而」方(に)醒(め

341 たり)但(し)▲能(く)聖(の)造(れる)儀(を)奉(ク)レハ、佛、亦(た)形(を)垂(れ、迹(を)示(す)、善見(に)云

342 (く)。佛、右(の)牙、帝釋(處)。▲右(の)軼(益)骨、師子國(中)にあり。増(一)に云(く)、優填王(は)栴檀(を)造(れり、波斯匿

343 ▲王、紫金(を)造(れり、二像(各(の)長(き)五尺(なり)。次(に)造塔(法(を)明(す)、雜心(に)云(く)、

344 ▲舍利(有(る)を)は塔(と名(つく)、無(き)を)者(支)提(と名(つく)、塔(或(は)塔婆(と名(つく)、或(は)

345 偷婆(と云(ふ)《此、塚(と云(ふ)「也」/亦(た)方墳(と云(ふ)▲支提(を)廟(と云(ふ)《廟者(貌

346 (なり)「也」《増(一)阿含(に)云(く)、初(め)て偷婆(を)起(て)故(き)寺(を)補治(すること、竝(に)▲梵福(を

347 偷婆(と云(ふ)《此、塚(と云(ふ)「也」/亦(た)方墳(と云(ふ)▲支提(を)廟(と云(ふ)《廟者(貌

348 (なり)「也」《増(一)阿含(に)云(く)、初(め)て偷婆(を)起(て)故(き)寺(を)補治(すること、竝(に)▲梵福(を

349 (なり)「也」《増(一)阿含(に)云(く)、初(め)て偷婆(を)起(て)故(き)寺(を)補治(すること、竝(に)▲梵福(を

364 363 362 361 360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350
 受(け)たり、何をか梵福返と云(ふ)、閻浮提一洲(の)人(の)功德返(の)如(き)は一轉輪王の▲功德返(に)如待
 (か)不、是(の)如(き)西東北の天下。乃至四天六欲。初禪(は)惣て多(き)をもて一▲梵主の功德返に比す、此、梵
 福量返と爲す、是(の)如(く)學返(ふ)當(し)、四分待には、若(し)塔返(を)起ては「者」。▲四方。若(し)は圓。
 若(し)は八角返にす應(し)、石塹木返(を)以(て)作(り)已(り)て、黒泥乃至石灰、白土▲等返(を)用(ゐ)て
 基返に安待(す)應(し)、四邊待に蘭楯返を作れ、華香返(を)安して上返に着け、旛蓋返(を)懸(く)る▲物返
 を安待(する)こと聽す、塔(の)上。蘭楯(の)上返に上待(る)こと得待不、護塔神贖・▲大論(には)密迹金剛
 鬼神道の中なり、／又(た)云(く)、執金剛菩薩、常(に)▲金剛返(を)執(り)て衛護(す)、五分には、佛の／四面
 (に)は五百の金剛あり(と)いふ「也」。若(し)取(り)与返(ふる)所待有るには、彼返(を)開(け)、旛蓋返
 (を)安(せ)むことも、像の▲上返(を)踏待(む)こと得待不れ、餘(の)方便返(を)作(り)て、蹬(り)て、
 之返を安(け)、若(し)塔、露地にして供養の具、雨に漬り「漬レ」、風に飄り、▲鳥鳥の淨(く)アラ不者、種種(の)
 舍返を作(り)て、之返を覆へ、地(に)塵返有(ら)は、種種の泥(を)もて之返に泥レ、▲足返(を)洗フ器(を)
 道の邊返に安待ク須(し)、外には牆門返を作(り)て安置せよ、若(し)は上美の飲食をは金寶等の▲器返(を)用
 (ゐ)て之返を盛モレ、白衣をして伎樂供養返(せ)令めよ、若(し)は飲食をは當に比丘。沙弥。優婆塞の。塔返を
 經レ營して作(ら)む者返に与待(ふ)「當」再讀し、食返(す)應(し)、舍利をは金寶塔の中返に安(け)、若(し)は
 繪綿の▲中、若(し)は持行せむ者下マレ、若(し)は畜生マレ、若(し)は頭上。肩上に。擔戴せよ。若(し)拂(ふ)には、
 樹の▲葉。孔雀の尾ハキ拂返(を)用(ゐ)る)應(し)、多(く)香華返有(ら)は、基の上、蘭の上、杙の上、嚮の中に
 ▲繩返(を)羅迦返せよ、貫(き)て屋の簷の前返に懸(け)よ、香泥返有(り)ては、手輪像返に作れ、乃至餘返
 有(ら)は、地返に泥レ(との)等くいふ、▲僧祇(には)塔の事と者、僧伽藍返(を)起(つる)時には、先(つ)好

- 365 地^返を規^レ度^レりて、塔^返を^レ作^レらむ處とせよ、其^レの^レ塔、南^返に^在待^レ、西^返に^在待^レ、[▲]不^レれ、東^返に^在き、北^返に^在く、應^レし、《中國^レの^レ伽藍の門、皆^レな東に向^レく》か故^レなり。佛塔、廟宇、
 366 /皆^レな東^返に^向き^レて開^レく、乃至厨廁亦^レた西南^返に^在く、[▲]彼^レの^レ國、東北の風多^返き^レに由^レりて^レの^レ故^レなり「也」。神州は南^返を^レ尚^レじて正陽^返と爲^レ、必^レすしも中土の法^返に仍^レら不^レれ「也」僧地をもて
 367 佛地^返を侵^レ待^レすこと得^レ待^レ不^レれ、佛地をもて僧[▲]地^返を侵^レ待^レすこと得^レ待^レ不^レれ、餘^レは盜戒の隨相
 368 に説^返くか如^レし、善生經[▲]に云^レく。善男子、如來は、即^レち是、一切[▲]智藏なり。是^レの^レ故^レに智者^レなり。當^レに心^返を^レ至^レして勤修して生身。滅身。形像。塔[▲]廟^返を供^レ給^レ待^レす應^レし、若^レしは、「於^レ空野
 370 の塔、像^返無^レからむ處にして、常^レに念^返を^レ繫^レして尊重讚歎^返す當^レし、若^レしは自[▲]力をもて
 371 作^レれ。若^レしは人^返を^レ勸^レめて作^レらしめ、作^レらむ^レを見て喜^返を生^レせ、如^シ其^レ、自^レら
 372 功德^レの^レ力^返有^レら者。要^レす[▲]廣^レく衆多^レの^レ「之^レ」人^返を^レ教^レへて「而^レ」共に之^返を^レ作^レる
 373 當^レし、既^レに供養^レし已^レりては已^レか身^レの中^返に於^レて[▲]輕想^返を^レ生^レ待^レすこと莫^レれ、三寶
 374 の^レ所^返に於^レても亦^レた是^返の^レ如^レ待^レくす應^レし、凡^レそ供養^返する所には人をして作^レら使
 375 め^レ不^レれ、他^返に勝^レらむか爲^レに^レせ不^レれ、作^レる時に悔^返い^レ不^レれ、心に愁惱^返せ^レ不^レれ、合
 376 掌讚歎し恭敬尊重せよ。若^レしは一[▲]錢一綫一華一香一偈一札一帊一時乃至無量寶無量[▲]帊無量時^返を以^レてせよ、若
 377 しは自^レら獨^レり作り、若^レしは他^返と共に作^レれ。善男子。若^レし能^レく是^返の^レ如^レく心^返を^レ至^レし
 378 て佛法僧^返を^レ供養せ者。若^レしは我現に在^レるも若^レしは涅槃^レの^レ後にも等^レしくして差別^返無^レし、
 379 若^レし[▲]塔廟^返を^レ見ては金銀銅鐵繩瑣旛蓋伎樂香油燈明^返を^レ以^レて「而^レ」[▲]之^返を^レ供養^レ待^レす應^レし、若
 379 し[▲]鳥獸踐踏毀壞^返を^レ見ては、要^レす塗治掃除して淨^返なら令^レ待^レむ當^レし、暴風[▲]水火。人の所壞の處

をも亦(た)自治(す)當(し)、自(ら)若(し)力(返)無(く)は、人(返)を(勸)め(て)治(返)す當(し)、或
 (は)金▲銀銅鐵土木(返)を(以)てせよ、若(し)塵土(返)有(ら)は灑掃除拂せよ。若(し)垢汚(返)有(ら)は香水(返)
 (を)以(て)▲洗へ。若(し)寶塔(返)を(を)作り及(ひ)寶像(返)を作(り)ては種種(の)旛香華(返)を(以)て奉
 上(す)當(し)。若(し)眞寶(返)▲無(く)して力、辨(返)すること能(待)は(は)不(は)次(に)土木(返)を(以)て
 「而」之(返)を(を)造り成(せ)よ、成(し)訖(り)ては亦(た)當(に)旛蓋▲香華伎樂をもて種種(に)供養(す)へし。
 若(し)是(の)塔(の)中に草木(の)不淨、鳥獸(の)死屍。▲及(ひ)諸(の)糞穢。萎華臭爛せは悉(く)除去(す)
 當(し)。蛇鼠の孔穴アラハ▲之(返)を塞(治)待(す)當(し)、銅像。木像。石像。泥像。金銀瑠璃頗梨等の像をは常(に)
 當(に)洗▲治(返)す「當」(再讀) (し)、力(返)に(に)任(せ)て香を塗れ。力(返)に(に)隨(ひ)て種種(の)瓔珞(返)を造作せ
 よ、乃至、猶(ほ)轉輪聖▲王の塔精舎の内(返)の如(く)して當(に)香(返)を(以)て塗(り)。若(し)は白土をもて
 塗(る)へし。塔像(を)作(り)已(り)ては、瑠▲瑠頗梨眞珠綾絹錦綵鈴磬繩瓊(返)を(以)て「而」之(返)を供養(待)
 (す)當(し)、佛像(返)を畫(く)▲時に、綵の中に膠(ニラケ)乳鷄子(返)を雜(待)へ(不)れ、種種(の)華貫。散華。妙拂。明
 ▲鏡。末香。散香。燒香。種種(の)伎樂歌舞(返)を(以)て供養(すること、晝夜に絶(返)え)不(待)る)應(し)、如(返)
 (か)せ▲不(れ)は、外道。蘇。大麥(返)を燒(ぎ)て「而」之(返)を(を)供養(す)、終(に)蘇(返)を(を)以(て)塔、像▲身(返)
 391 392 に塗(待) (ら)不(れ)、亦(た)乳洗(返) (せ)不(れ)、半身の佛像(返)を造作(待) (す)應(から)不(若) (し)形像(返)
 394 393 有(り)て身、具▲足(返) (せ)不(は)、密(に)藏覆して、人(返)を(勸)め(て)治(返)せ令(待) (む)當(し)、治、具
 足(し)已(り)て、然(して)後、顯示して。毀壞の▲像(返)を(見)て、當(に)心(返)を(至)し(て)、供養、恭
 敬すること、完(返)きか如(く)、別(返)にすること無(待) (か)る)應(し)、是(返) (の)如(く)供養(せよ)。要(す)身
 ▲自(ら)作(れ)。自(ら)若(し)力(返)無(く)は他(返) (か)爲(に)使(ハ)レ、亦(た)他人(返)を(勸)め(て)之(返)

- 396 (を)作助(せ)令得(む)當(し)、若(し)人、能(く)四天下(の)寶返(を)▲以(て)如來返に供養せむに、人
 397 有(りて)應(に)種種(の)功德返(を)以(て)尊重讚▲歎せむ、是、二の福德は等(しく)して、差別返無(し)、
 398 無垢清信女問經(に)云(く)、知返(ら)未、佛▲塔地返(を)掃(く)には何(の)善報返(か)有(る)、四相をも
 399 て塗治す(る)、華香供養する、復(た)何(の)福報かある、▲禪返(に)入(り)て梵行返(を)修し、三歸五戒に復
 400 (た)何(の)福返をか得(む)、佛、女返(に)告(けて)言(く)。佛地返(を)掃(く)に、▲五福返(を)得(む)、
 401 一(には)自心清淨なり、他人、見已(り)て、亦(た)淨心返を生ず、二(には)他返(か)爲(に)愛せらる。三(に
 402 は)天▲心に歡喜す。四(には)端正の業返を集(む)。五(には)命終(して)、善道天中返に生(る)る)なり、若(し)
 403 人、佛返(を)信(し)て、▲圓輪の形返を作り、塔地返(を)塗(り)、華返(を)散(し)、香返(を)燒(かは)、
 404 是返(の)如(き)供養已(り)て、彼(の)人、命終して、▲弗婆提返(に)生(れ)て、富樂自在ならむ、後(に)化
 405 樂天返に生(れ)む、若(し)人、佛返を信(し)て、半月形返を作(り)て、▲佛塔地返(を)塗(り)、華返(を)
 406 散(し)、香返(を)燒(か)者、瞿陀尼返(に)生(れて)、後(に)兜率天返(に)生(れ)む、若(し)人、佛返
 407 (を)信(し)て、佛▲塔邊返に於(て)、四方に地返を塗(り)、華返(を)散(し)、香返(を)燒(かは)、彼終(り)
 408 て、鬱單越返(に)生(れ)て、後に炎摩▲天返に生(れ)む、若(し)人、佛返(を)信(し)て、人の面の形返を
 409 作り、佛塔地返(を)塗(り)、華香供養せむ、所有(の)善根果報、是返(の)如(し)、若(し)人、禪返(に)入
 410 (りて)、四聖行返(を)修(し)、佛法僧返(に)歸(し)、五戒返を受持(せ)は彼(の)人、▲無量無數の善根福報、
 411 窮返(り)無し、後(に)涅槃返を得む、涅槃返(に)云(く)、僧▲佛物返(を)犯(さ)不、佛僧地返を塗(り)掃(き)、像、
 若(し)は)佛塔返(を)造(り)、常(に)歡喜の心返(を)生(す)、智論▲沙弥戒には、香、身返に塗(り)掃(き)ら)不、
 云(く)、何(に)してか三寶返を供養セム、答(ふ)、物返(を)貴(ふ)所、時返に隨(ふ)所須返を以(て)▲「而

用(ゐ)て供養す。或(は)以(て)地及(ひ)壁、并(に)行來坐處等(に)塗(る)なり、十輪(に)云(く)、若(し)寺(を)破(し)比丘(を)殺(害)せむ(に)、其(の)人終(らむ)と欲(む)に、支節、皆(な)疼(き)、多日語(ら)不、阿鼻(獄)に墮(し)て具(に)諸苦(を受)け(む)といふ、^二(に)造寺の法。盛徳法師(有)り、寺(を)造(り)て十篇(を)誥(し)、^一具(に)造寺の方法、祇桓の圖樣(を)明(せ)り、所造(有)り(ら)むに隨(ひ)て必(す)正教(に)准(れ)り、并(て)護(持)、^一匡(衆)、僧(綱)、網要等(の)事、繁(く)して具(に)せ不、宗(を)略引(す)へし、造寺の一法(を)科(つ)、謂(く)、處(所)に讒涉(を)避(く)須(し)、「於(に)尼寺及(ひ)市(の)傍(を)府の側等(を)離(る)當(し)、佛殿、經坊(を)は極(て)清潔(に)せ(令)めよ、僧院、厨倉(を)は趣(二)事(に)充(する)こと得(よ)、此(如)くして則(ち)後(に)壞(する)所無(し)、今時、未(法)には、寺(を)造(る)こと唯(た)處所(のみ)有(り)て事、受用(すること得、亦(た)羯磨法(を)用(する)者(有)り、而も恨(む)らくは(外)に儀式として相(を)表(して)人(に)知(ら)令(む)る者(無)きか)故(に)、祇桓圖中(に)凡(そ)木石、土宇(を)立(つる)に、^一竝(に)所表(有)りて、人天(を)して相(を)識(ら)令(む)、以(て)釋(門)は法(多)多(き)ことを知(せ)しむ(る)なり、故(に)、能(く)影、邪術(を)覆(じ)、禽獸、威(を)畏(り)、儀形、隱(映)して世(の)爲(に)飲(ミ)仰(ク)、但(し)、歴代、綿(に)積(み)て教(を)秉(ト)ルこと陵(遅)し、^一事存(して)法(は)隱(れ)、厝、旨(意)を擧(メ)たり、俗人、既(に)法(を)曉(ら)不、衆僧、示導(を)解(せ)未、^一但(し)、相(比)仿(髣)髴(し)、「^一仿(教)ヒ」、虚(しく)財物(を)費(す)、心(を)精妙(に)競(ヒ)、力(を)もて他(に)勝(ら)むこと(を)志(サ)ス、房廊、臺觀(を)は(務)務(め)て高顯(せ)令(め)て、彼(に)過(き)たる(を)便(ち)止(め)て都(て)法(を)存(せ)不、又(た)還(り)て自(ら)騰(踐)して己(か)莊宅(の)如(く)す、^一衆僧の房堂(を)は諸俗受用(し)、毀(壞)損(辱)して情(に)愧(つる)所(無)し、道(に)屈(し)、俗(に)承(け)、奴(の主)に事(ふ)るか^一如(く)す、是(を)寺法滅(と)名(つ)く「也」、《其(の)

- 甚(しき)者(者)衆僧(衆僧)を打罵し、種種(種種)の「非法あり」「非法し」「要(要)を取(り)て之(之)を」／言(は)は、僧(僧)に從(ひ)て強(力)をもて抑(奪)し、貸借(貸借)し、乞請(乞請)し、乃(乃)至(至)屍(屍)を僧院(僧院)に停(止)め擧(喪)し、寺内(寺内)に塚(塚)を／置(置)き、澡浴(澡浴)する(か)等(等)は竝(に)「非法也(非法也)」。若(若)し「往(往)を改(改)め來(來)を修(修)メ、法(法)を追(追)ひて更(に)新(し)く慎(敬)して、犯(す)こと無(く)▲者(者)是(是)則(ち)持(寺)の法(法)を護(護)る「也(也)」《俗(俗)人、寺(寺)を造(造)する本(本)は、福(福)を求(め)む》か爲(爲)なり、出(家)の良(良)因(因)得(得)道(道)の良(良)縁(縁)を(を)作(作)せむ(には)、唯(唯)た「禮(禮)拜(拜)供(供)養(養)を法(法)と爲(應)し、諮(諮)請(請)し、時(時)々(に)觀(觀)問(問)し、如(如)法(法)往(往)來(來)して彼(彼)此(此)利(利)益(益)し、自(自)他(他)惱(惱)む」こと無(き)を護(護)法(法)と名(名)つゝ「也(也)」故(に)増(一)に云(く)、阿(阿)闍(闍)世(世)王(王)。信(信)を得(得)て已(已)後(後)に國(國)中(中)の(人)に勅(し)て佛(佛)に事(事)る「之(之)家(家)賞(賞)輸(輸)迎(迎)送(送)す」乎(乎)因(り)て、即(ち)明(明)敬(敬)に隨(ひ)て三(三)衣(衣)一(一)切(切)の衆(衆)具(具)を護(護)ることは、竝(に)塔(塔)の想(の)仰(して)は、威(威)儀(儀)を整(整)一(一)斂(す)といふ、飲(飲)食(食)をもて施(施)作(作)せむに、心(心)に常(に)法(法)を念(念)へ、憶(して)「而(而)奉(奉)行(行)すれ者(者)、俗(俗)人(人)に終(終)に輕(輕)爾(爾)シク陵(陵)慢(慢)し、▲非(非)法(法)に干(干)亂(亂)すること得(得)不(不)、假(假)令(令)ヒ世(世)中(中)の賢(賢)人(人)の内(内)心(心)、堅(堅)正(正)にして外(外)に威(威)儀(儀)有(有)る」スラ、猶(ほ)見(見)ては▲敬(敬)肅(肅)して、敢(て)侮(侮)一(一)拚(拚)タラ不(不)といへり、《文(文)侯(侯)の干(干)木(木)を敬(する)か》如(く)、劉(劉)氏(氏)の孔(孔)明(明)を重(重)するに似(似)れりとの等(く)いへり《況(や)出(出)世(世)の道(道)士(士)は、佛(佛)の法(法)衣(衣)を被(被)て、▲佛(佛)の行(行)處(處)に遊(遊)じ、威(威)儀(儀)、序(序)序(に)して、見(見)る者(者)い善(善)を生(生)す、誰(誰)か尊(尊)敬(敬)せ不(ら)む、若(若)し輕(輕)笑(笑)すること有(ら)は、皆(皆)自(自)らの失(失)に由(由)なり、故(故)に敬(敬)せ不(待)といふこと無(き)こと知(り)ぬ「也(也)、敬(敬)は則(ち)儀(有)りて、豈(に)唯(た)恭(恭)攝(攝)して冥(冥)に利(利)養(養)を招(招)かむや、《田(田)は必(必)す》良(良)美(美)にして種(種)子(子)を求(め)不(して)「而(而)、種(種)子(子)を自(自)ら投(投)す、道(道)必(必)す純(純)備(備)して利(利)養(養)す」須(須)から不(して)「而(而)、利

438 437

436 435

434 433

432 431

430

429

428

427

439

養潛托(す)此(返)に由(りて)「而」觀(せ)は、俗人(返)の爲に薄(薄)マ所(所)こと者(者)他(他)の咎(咎)に▲非(す)「也」、
法(返)を以(て)「於」身(返)を滅するに、貴賤の見(見)所(所)を以(て)して侵陵(返)せ使(待)むる(返)こと得る耳、若(し)

440

能く法(返)を識(り)て、護持すれば人皆(な)宗(仰)す。誰(か)敢て之(返)を侮(侮)慢(せ)む哉(哉)《道(返)を以(て)貴人(返)

441

(を)敬(し)タテマツル者には、起(ち)て迎へ將て送(送)る(返)こと得(得)不(は)亦(た)、牀(返)を同(しく)して
▲共(に)坐(せ)不(れ)、唯(た)、大坐(返)を(を)得(得)て、之(返)を鎮(鎮)するに、道(返)を以(て)せよ、又亦(た)

▲「於」橋慢(返)を生(待)す(返)應(から)不(也)《

442

▲夫(れ)昏俗、務(返)多(く)して、惠觀、修(返)し難(し)、福分(返)を營(營)待(む)ことを制(し)て、愚惑(返)を
用接す、而(も)施(せ)は乃(ち)▲雜繁にして、皆(な)多(く)食供(返)を設(け)たる毎に、請(返)に計(計)する(返)

443

に於て、教法(返)に違(違)ふ(返)こと有(れ)は、外に譏毀(返)を生(生)し、内(に)癡慢(返)を長(長)す、反(り)て苦趣(返)を招(招)き

444

て、師誘(返)を成(成)さ未(未)、故(に)經訓(返)を撮(撮)略して、試(み)に論(論)すること別(別)の如(し)、▲中(返)に就(就)き

445

て十(返)に分(分)つ、一(に)請(請)を(を)受(受)くる法(法)、二(に)往(往)計(計)く法(法)、三(に)請(請)家(返)に至(至)る法(法)、四(に)

446

座(返)に就(就)き客(返)に命(命)する法(法)、▲五(に)食(食)の淨汚(返)を觀(觀)する、六(に)香呪願(返)を行(行)する。七(に)食

447

方(方)を受(受)くる法(法)、八(に)食(食)竟(り)て收斂(收斂)する、九(に)嚙布施(返)に▲達(達)する。十(に)請(請)家(返)より出

448

(つ)る法(法)をいふ、初(初)に受(受)請(請)を明(明)す者(者)、十誦(誦)には請(請)を(を)知(知)らむか爲(爲)の▲故(に)。維那(返)を立(立)待

449

(つ)須(須)し、出(出)要律儀(儀)には番(番)ひて寺護(護)と爲(爲)、又(又)たは悦(悦)衆(返)と云(云)ふ、本(本)の正音(音)は▲婆(婆)邏(邏)なり、此(此)には次第(第)

450

と云(云)ふ、僧(僧)祇(祇)に云(云)く、若(若)し來(來)りて比丘(丘)を明日(日)の食(食)に請(請)せ者(者)、定(定)めて答(答)へて、決(決)して來(來)

451

(ら)むと云(云)ふこと得(得)不(不)れ、語(語)る(返)應(應)し、若(若)し縁(縁)事(返)無(無)くは、之(之)を(を)計(計)す(返)當(當)しと、

- 453 452 若(し)僧(を)請(待)すること有(ら)者(は)姓(▲)名(▲)客人。舊住。巷陌(返)を問(待)ふ(ふ)應(し)輒(く)往(返)く(く)こと得(待)不(れ)先(つ)一人をして、若(し)は月(一)直、園(一)民、▲沙弥を前(返)に在(き)て、訪(ヒ)問(返)は(は)令(待)令(む)應(し)、比丘(返)を試(三)拵(待)ラム「一、試拵せむ」ことを恐(れ)及(ひ)留難(返)有(ら)は、僧、食(返)を(を)失(待)せむこと恐(る)か故なり、五(▲)分(には)、白衣の家に會せむにハ、僧の臥具(返)を(を)借(る)應(し)、僧祇には、比丘、俗家の會(返)を(を)設けむか爲(に)、▲幔(返)を(を)張(り)及(ひ)諸の供具(返)を(を)すること得、唯(た)女人(返)与(ト)共に擧(け)《及(ひ)食(返)を(を)作(待)すこと》得(待)不(れ)、四分には、菩提王子、佛(返)を(を)▲請(せ)しに、「於」階陛(返)從(り)衣(返)を(を)布(き)て、佛をして踏(み)て上(を)過(返)ラ令(め)き、世尊、受(返)け(け)不(之)返(を)却(待)《さし令(め)▲未來比丘(返)の爲の故(なり)》。增(一)に云(く)、如來は請(返)を(を)許(す)に、或(は)默然し、或(は)儼(一)頭(キ)タマヒ、或(は)彈(一)指(し)タマフ、五(▲)百問(に)云(く)、佛(返)を(を)作(り)て、物(返)を得(て)、比丘(返)を(を)請(せ)は、食(に)返(合)待(は)不(若)先(に)三の會(返)を(を)許(す)テ、後(に)一の會(返)を(を)作(ら)は、三(ひ)行(香)し、三(ひ)施(せ)よ、了(返)ら(不)は、還(り)て願(せ)よ、若(し)鬼子母の食(を)は祝願して取(り)て食(せ)よ。沽酒の▲家の門には一切の時に入(返)る(る)こと得(待)不(れ)更(に)餘の門(返)有(ら)は得(よ)若(し)比丘の會(返)を(を)請(する)には、當(に)一(日)の戒(返)を(を)持(ち)て、一日、沽酒(返)を(を)せ(せ)不(は)往(返)く(く)こと得(へ)し、屠家も亦(た)尔(なり)若(し)師(返)と(と)共に並(な)へ坐(ス)へ者、更(に)別(の)處(返)無(く)は得(よ)同(禁)して、食(返)すること得(待)不(四分)には、請(に)二種(返)有(り)即(ち)僧(次)と別(請)と(なり)「也」律(には)▲別(請)を(を)開(せ)り、然(も)諸(經)論(に)制(する)こと者(少)返(から)不(梵)網(に)云(く)別(請)の物(者)即(ち)四(方)の僧(の)物(返)を(を)盜(む)なり、仁(王)經(も)亦(た)別(請)の過(返)を(を)呵(責)せり、十(誦)と善(生)返(と)に云(く)別(に)佛(と)五(百)羅(漢)返(と)を(を)請(待)す(と)雖(も)猶(故)僧(の)福(田)返(を)請(待)す(と)名(く)こと得(待)不(若)能(く)僧(中)返(に)於(て)一(の)似(一)像(極)▲惡

の比丘返を請せは、猶ほ無量の果報返を得む、増一成論に云く。海水返を飲むに、即ち衆衆流流飲飲を待か如し、僧次に僧返を請するも亦た尔なり。五分には但た解脱返の爲に出家せる者を僧次返と爲待ること得、唯た惡戒返を犯せる人返をは除く、五百問に云く。別請返を受け已りて、人をして代去返せ遣めむに、主人の意に苦苦ムこと無き者得よ。若し犯墮返を嫌は者既に僧次は福大なり、憑り請返すること有ら者は「應に僧次の▲功能返を説きて、俗の心返を開悟し」「説きて、俗の心を開悟す」應し、別請返せ令むること勿れ、別請の法、隨相の中返の如し、今俗の有の▲名返を執り、請者返を邀し、然して口には往くと許待すと雖も、必す筆註返す須し、有る人、赴の字返を書き爲ルは「者」、此れ字學返を知待ら未る耳必斯舉返有らは、註して計の字返を爲待る可し、下の「之」赴上赴の字返に爲るのみ上の「之」計は下返計の字に爲るのみ此れ▲乃し細く碎くとも、甚た高望返を補ク、故に諺に云く、借らむには時に還返さむと念へ、貸サムには時に償ツクハムと念へ、事ハ鄙陋返なりと雖も、廉恥の「之」本なり。薩婆多、請返せ被る人は僧返與同去け、白返さ不して先に入ら者、▲墮返。主人明日に食返を作るに、今日自ら往か者墮返。主人の喚返を除け、若し食して後、主▲人喚ヒ留返め不らむに、自ら住か者墮返。經勞の知事の人は、僧の後返に在りて到ら者墮返。食して▲瞞返さ未るに、去ら者亦た墮返。餘の人、私に行するには直に同學返に報せ者「報せ」は「者」。得大界の内の近き▲寺返なりと雖も、白衣の家なりと白返さ不は、亦た犯なり。若し白して還ること晚クして僧を惱返ま令め者、吉羅なり。善見に▲檀越、比丘返を請せは、沙弥、具返を受待け未待と雖も亦た比丘の數返

481 480 (に)入(る)へし、涅槃乃▲至十戒(返)を(受)得(け)未とも、亦(た)請(返)を受(得)く(る)こと得(む)、僧(祇)には、若(し)道行(せ)むには、念(返)を(作)りて、某精舍(返)に至(り)て、食(返)す▲當(カラム)ニ、若(し)餘(の)處(返)に過(り)て、食(せ)者(は)悔(過)すへし、若(し)彼(の)僧(返)に(値)ひて、請(返)を(受)け(て)隨(ひ)て去(ら)は、罪(返)無(し)、▲十誦(には)請(返)せ(不)る(に)自(ら)來(り)て、食(する)ハ、吉羅(返)を犯(す)、五百問(に)云(く)。但(た)捷(捷)捶(返)を打(ち)て即(ち)▲食(供)返(する)こと得、請(と)非(請)返(与)得(を)問(待)り。

483 482 (は)不(れ)、何(を)以(て)の故(に)捷(捷)捶(返)を打(つ)ことは本(より)僧(返)を(集)得(め)むか爲(の)故(な)り。

▲二(に)は往(ぎ)訃(く)法。四分(に)云(く)、若(し)請(返)を(受)得(け)むと欲(む)は、衆僧(の)常(の)小(食)大(食)の

▲處(返)に往(ぎ)て住(返)す應(し)、若(し)檀越、時(到)返(り)ぬ(と)白(き)者(は)上(座)、在(り)前(て)、鷹(の)行(返)ノ如(く)して「而」、去(る)應(し)。諸(の)比(丘)は偏(に)右(肩)返(を)祖(き)て、在(り)後(て)行(返)く應(し)、若(し)佛(法)僧(病)比(丘)の(事)返(有)ら(者)當(に)▲上(座)返(に)白(し)て在(り)前(ち)て、必(す)「於」中(返)に去(る)

へし、命(梵)難(返)有(ら)者(は)若(し)問(ひ)問(は)不(れ)は、去(る)こと聽(す)。若(し)上(座)道(返)に在(り)て、大(小)便(の)處(返)に行(か)は、來(返)る(を)待(ち)て然(して)後、前(返)の(如)く去(る)應(し)。

三(には)請(家)返(に)至(る)法。若(し)佛(像)及(ひ)聖(僧)の(座)返(を)安(置)得(せ)未(者)上(座)有(徳)の(者)先(つ)處(分)して像(返)を(安)し(て)極(て)清(潔)に(して)僧(の)座(返)於(勝)得(ら)令(め)よ、乃(子)覆(障)高(顯)の(處)返

に在(ぎ)訖(り)て、然(して)▲後、聖(僧)の(座)返(を)布(置)せよ、其(の)法、五(卷)返(有)り、梁(武)帝、中(國)三(藏)返(に)對(ひ)て▲之(返)出(せ)り、具(には)錄(返)す可(から)不、請(寶)頭(盧)法(經)に(説)返(ける)か如(し)、預(め

請(返)に)宿(ル)ことせ)令(む)、空(靜)▲處(返)に在(り)て、敷(設)虛(軟)に(して)座(返)と爲(せ)よ、我(若)し)來(ら)む

493 492 491 490 489

488 487 486 485 484

483 482

494 時には、坐處、相_返有_返(り)、今の世に、時_返(に)臨_返(み)て、虚_返(し)く▲設_返(く)とも亦_返(た)法式_返無し、既
 (に)易_返(から)不_返(る)こと知_返(り)ぬ、門_返師_返の比丘、經_返(に)依_返(り)て、預_返め示_返せ、必_返(す)預_返め修_返(せ)
 495 不_返(れ)は、齋_返に▲臨_返(み)て上座。當_返(に)新_返(し)く軟_返(か)なる布、綿、衣服の鮮潔_返なるを索_返めて者_返、「於_返」僧
 496 の首_返に在_返(く)へし、▲氈褥の上_返に在_返(き)て廣_返(く)鋪_返設_返を張_返(り)て、足_返に大坐_返(の)「之_返」處_返を得_返
 497 令_返め、然_返(して)後、上座、次_返に於_返て乃_返(し)坐_返せよ、坐_返(し)訖_返(り)て、方_返(に)乃_返(し)僧佛二座_返を分處_返
 498 (す)▲須_返(から)不_返、又_返(た)、坐處、狹_返なるを以_返(て)排_返躔_返して「_返、排_返躔_返メテ」▲地_返に在_返(か)不_返、
 499 或_返(は)佛前_返(に)安置_返せよ、或_返(は)處坐_返と雖_返(も)「而_返」、狹小_返に位_返を舒_返へム、此_返の如_返(き)上座は、▲其
 500 の可_返を見_返未_返、既_返(に)自_返(ら)敬信、勝緣_返無_返(し)、亦_返(た)、俗士_返をして三寶_返(を)敬_返(せ)不_返(ら)
 501 令_返(む)、此_返乃_返(ち)滅法_返▲上座なり。僧祇_返には、若_返(し)檀越、僧_返を請_返(せむ)に法_返(を)知_返(ら)不_返(を)も
 502 て好_返(き)に(あら)不_返敷具_返を上座_返に与_返へ、好_返(き)▲牀敷_返を以_返(て)年少_返に与_返へは、上座、教_返(へ)て云_返
 (ふ)應_返(し)、好_返(き)に(あら)不_返者_返を以_返(て)年少_返に与_返(ふる)こと、若_返(し)施主、▲知識_返の比丘_返(の)
 503 爲_返に故_返に好_返(き)牀褥_返(を)敷_返か者、共_返(に)爭_返(ふ)こと得_返(不_返れ)、施主_返(の)意_返(に)隨_返へ、乃至飲
 504 ▲食等_返(も)亦_返(た)尔_返(なり)。若_返(し)施主、僧_返(を)請_返(する)法_返を知_返(ら)未_返は、知識_返の尼_返も形▲像_返を
 安置_返し、食_返を益_返す法_返を教_返(ふる)こと得_返(り)て然_返(して)後、坐_返(せ)よ。別處_返に在_返(る)應_返(し)、又
 505 (た)、僧_返(の)所_返に勝_返(ること)得_返不_返れ、長含_返(に)云_返(く)。▲世尊、會_返(に)計_返(き)タマフに、常_返(に)衆
 506 の中_返(に)在_返(り)て坐_返(さ)レき、左面_返には比丘、右面_返には清信士_返ありき、▲四_返(に)は座_返に就_返(き)て客_返を
 507 命_返(ふる)法_返。彼_返(の)上座、佛僧二座_返を置き設_返け已_返(り)て然_返(して)後、聖僧_返▲座_返に去_返(ること)一尺許_返(に)
 508 して、尼師檀_返を敷_返け、敬_返(を)表_返(せむ)か爲_返(なり)「也_返」。四分_返には、食處_返(に)往_返(き)ては錯亂▲雜聚

して「而」住返す應待（から）不、次返に隨（ひ）て坐返す應（し）、上座、坐（し）已（り）て中座、下座返を
 看待（る）應（し）、法返（の）▲如（く）せ）不待して、善く身返を覆待（は）不待（ら）令待（むる）こと勿（れ）、
 若（し）有（ら）者は、彈指して覺返（ら）令（め）よ、若（し）は人（を）して語待知返（ら）遣待めて好（く）▲法返（の）
 如く坐（せ）しめよ。中座、坐（し）已（り）て上下（の）座返を看待て、非法返ナラ令待（むる）こと勿（れ）、下座、
 坐（し）已（り）て亦（た）、互に▲上中返（を）看（る）こと亦（た）尔なりといへり。僧待祇返には、好く覆身坐返（せ）不待
 者は、謂（く）、細く生待疎なる衣返を着、形體、露返現して摩訶羅坐返は不正なりといフ、語（ひ）て汝待か衣返を正待
 セト云へ、若（し）覺（ら）不者語（ひ）て云（ふ）へし、汝待か▲形返を覆へと、尼の坐、正返（し）から）不（ら）むを
 は語（ひ）て知返（ら）令待（むる）こと得（不）れ、其（の）慙恥返せむこと恐（る）なり、方便返（を）作（り）
 て、遣（り）て物返を取（ら）令（む）應（し）、▲若（し）婬女の故返に作る者待ならば、當（に）自（ら）起（ち）て避
 り去返（り）ぬ「當」（再讀）（し）、四分に、請（する）家返に至（り）て、彼此、年▲歳の大小返を相（ひ）問待と訖（り）
 て坐（せ）よ。若（し）日時、過返（き）ナムと欲待（る）を恐（れ）は、上座八尼は次第（に）坐返（せ）しむること聽
 （す）、餘者は▲隨（ひ）て坐（せ）しめよ。僧、須待く此返に准待（る）「須」（再讀）（し）、僧待祇返には、勞待ク食返を問待
 て云（ふ）へし。家中、何待如そ生活すること好（き）や不待や（との）等（く）いへり、▲四分に、故返に後返に在（り）
 て、往（き）て食待上に諸比丘をして起返（た）令（む）應（から）不、亦（た）、來（る）を待見（る）こと得（と
 も、▲起返（つ）こと須待（る）不、若（し）、來（る）未者は。比座、處返を開け（と）いふ、僧待祇返に、若（し）可
 啖待の事返有（ら）は、上座、言返（ふ）應（し）、云（く）、▲何そ聖毘尼の中に斷返を出（し）、齒返を現待にして呵
 呵として「而」啖待フ。當（に）之返を忍（ひ）て無常苦空▲無我死想返を起待（す）「當」（再讀）（し）等待クイへ、由待止返
 （む）可（から）不（は）當（に）衣の角返を以て口返を遮待いて、徐待徐待く制止せよ。身、不定ナラ▲者は。當（に）手足返

(を) 動後 (す) 「當」(再讀) (し)、乃至草返 を折(り) て漸漸(く) 自制せよ。義(を) もて准(ら) は、死喪と請處と
 「及」▲凡食家返 とに至(ら) むには、竝に僧祇返 に准(る)、慎(み) て喧咲し、「喧ガクキ咲ヒ」、「及」頭返 を交(へ)
 て雜説し、世論返 を妄談後 (する) こと無(か) れ、五分に、▲若(し) 請の處に外客の比丘、入(る) こと得後 不
 は、主人返 に語(ひ) て入(る) ことを聽せ、許(さ) 不者語(ひ) て云(ふ) へし、我(か) ▲食分返 を与(へ)
 て自(ら) 共に等食(せ) む、又(た) 許(さ) 不者返 自(ら) 語(ひ) て僧坊に食返 有(り) と委一知(せ)
 しめて往(き) ▲彼に去返 (せ) しむ可(し)、然(して) 後、乃(ち) 食せよ。薩婆多、門外の比丘を一處返 に通集(し)
 て一大者返 を喚ヒ▲入れよ。若(し) 更に餘の集返 (ら) 不(る) 者をも亦(た) 喚ヒ之返 (を) 入(れ) よ、捷拍返
 を打(つ)と雖(も)、終(に) 遮返 (せ) 不(る) をもて、方(に) ▲清淨返 なる(こと) 得須(し)、隨想返 (の) 如
 (し)「也」* 五(には) 食返 (を) 觀する法。四分(に)、上座、前(め) て問(ひ)て言返 (ふ) 應(し)、果▲菜をは
 淨フや不や、若(し) 未返 (た) しと言(は) 語(ひ) て淨(は) 令(め) よ、僧祇には上座、當(に) 知返 (る) 「當」再
 應(し)、誰か房返 を看ル、誰(か) 病する。▲語(ひ) て食返 (を) 与後 (ふ) 應(し)、若(し) 檀越借マ者返、語返
 (ふ) 應(し)、長壽の法なり、与返 (ふ) 應(し)、与返 (へ) 不(る) こと得不れと、若(し) 日ノ晚レ者返、先(つ) 取
 (り) て發遣して去返 (ら) 令後 (む) 應(し)、六(には) 行香呪願の法。四分の中に食(し) ▲竟(り) て、方に爲
 (る) なり、呪願し説法せよ、而も此(の) 土に盛に行 (する) こと竝(に) 食の前返 在(り) て道安法師、此(の) 法返
 (を) 布一▲置(する) こと、依(り) て「而」之返 (を) 用(るる) に理返 於失返 無(し)、若(し) 請家返 至(ら)
 むには、施主、讀經返 (せ) 令め者返。語返 に▲依(り) て之返 を爲よ、主人、口に言返 (は) 不者返 輒く問返 (ふ)
 須(から) 不、邪命返 に類するに同し、増(一)に云(く)。供返 (を) ▲設後 (くる) こと有(ら) む者は、手に香
 爐返 (を) 執(り) て「而」時、至(り) ぬ(と) 白せ。佛言く、香をは佛の使返 と爲(す) 故(に)。之返 (を) 須

- 549 548 547 546 545 544 543 542 541 540 539 538 537 536 535
- (ゐ)る「也」。賢▲愚經には蛇、金(返)を施(し)已(り)て人をして香(返)を行イテ僧の手の中(返)に置(待)か)令(め)たり、乃至香爐(返)を執(り)て遙(か)に佛僧(返)を▲請す、富那奇中の説(返)の(の)如し、若(し)行香は「者」、婦人の指をして掌の▲中(返)に控(ケ)令(め)不れ、語(ひ)て懸(くる)に、放夕令(め)よ、必(す)肯(返)せ)不者(は)便(ち)手(返)を縮(ク)メテ當に過ぎ去(返)ら)使(待)む)可(し)、若(し)男子(返)有(ら)は▲幸に之(返)を行(待)力遣めよ、尼の法は前(返)に反(す)へし、深(く)罪(返)を防(待)ラム(か)爲(の)故(に)。五百問及(ひ)三千(に)云(く)、立(ち)て香(返)を受(待)くること▲得(待)不、因(り)て比丘の香(返)を受けし女、其(の)手(返)に觸(ツ)レシに欲(一)發して道(返)を罷(ヤ)ム、佛、言(く)、若(し)立(ち)て▲受(け)者吉羅。行(一)香の時に唄する經文(返)を見(待)未(して)「而」諸(の)經律に多(く)唄匿の比▲丘有(り)。十誦(には)諸天、唄(返)を聞(き)て心に喜(返)はむか)爲(の)故に唄(返)を開(き)て、四分に、若(し)檀越、布▲施(返)を聞(き)て(むと)欲は布施を歎(返)す)應(し)、檀越の法(返)を聞(待)かむ(と)欲は爲(に)檀越の法(返)を歎(せよ、乃至過▲去の父祖(返)を説(待)か)むことを聞(待)かむ(と)欲は爲に父祖(返)を歎(す)應(し)、乃至佛法僧(返)を讚(すること亦(た)尔(なり)といふ。僧祇(に)云(く)。上座、前の人(の)施(返)する)所(待)を)知(る)▲應(し)、當に爲に時(返)に應(ひ)て呪願す。若(し)能(返)へ)不は次の座、説(返)く)應(し)、又(た)▲能(返)へ不者(は)乃(し)下座(返)に至れ、乃至下座(に)し)て都(て)無(く)者並に罪(返)を)得、比世流布して競(ひ)て華シキ辭(返)を飾(り)て▲言(ふ)こと其の實(返)に過(く)と、凡(そ)豎(なる)を)は責(揆)返)と褒(揚)しき貧賤を)は鼎(食)返)に逾(待)え)たり(と)讚(む、言(返)を發(ク)に必(す)虚妄(返)に▲成(り)て事(返)を)舉(くる)に唯(た)訛(語)返)を増(す)か)故(なり)、成實(に)云(く)。是、經法(返)なり(と)雖(も)説(く)こと時(返)に應(待)は)不(は)、▲名(け)て綺語(返)と爲、況(や)浮(一)雜(返)に於(て)せむ)焉(言(返)ふ)可(む)哉(や)今、正條(返)を立(て)て永(く)准用(返)せ)しむ可(し)、僧(祇(には)若(し)亡人(返)

550 (の)爲に福^返を施せむ者には、是の呪願^返を作^待應^し、一切の衆生の類、命^返有^らは^皆な^死返
 に歸す、彼(の)善惡の行^返に隨^ひて、自^ら其(の)果報^返を受^く、惡を行^ひては地獄^返に入^る、
 善^返を爲^せ者^は天^返に生^る、若^し能^く道^返を修行する八漏盡、泥洹^返を得む、若^し子を^返生
 (し)て、福^返(を)設けむに者^は云^返ふ^應し、童子、佛七世の大聖尊^返に歸依す、譬^へは^人父母の「於」
 其(の)子^返を慈念して世の「之」樂具^返を^舉げ^て、皆^な悉^く室家の諸(の)眷屬、樂^返(を)受^け
 むこと得^返令^待め^むと欲^待る^るか如^し、亦^た極^まり無^{から}む、若^し新^しき舍、成就し、
 555 554 553 552 551 550
 估^客の行^返せむ(と)欲^及以^ひ婦^返を取り、若^し復^た出家せむにも各(の)呪願^返有^り、▲文、彼
 (の)説^返(の)如^し、僧の上座、知^返ら^不は罪^返(を)得、廣^きこと卅四卷中^返(の)如^し、長言には
 559 558 557 556
 世尊▲呪願して云く。敬^返(す)可^きには敬^返を知^り、事^返フ可^きには事^返ふ^ること^を知る、博
 と施し兼^ねては愛して慈愍の心^返有^るは諸天に歎^返(する)▲所の常(と)善^返と會^せむ。五分(には)佛、呪
 願して人^返を賣^{して}云^く・四足汝安隱ナレ、二足▲汝安隱ナレ、去^らむ時に亦^た安隱ナレ、來^らむ時
 (に)亦^た安隱ナレ、田^返(を)耕^すに望^返有^り、種^返(を)下^すに亦^た望^返▲有^待る^るか如^し、
 汝、今、海^返に入^りて望^三果^返(を)獲^むこと亦^た是^返(の)如^し、義もて此の言^返に准^せは、佛は
 564 563 562 561 560
 四辯^返無^待(か)る^可けむや、縁^返に▲對^ひて止^つ、前法^返を施^しタマフ、自餘の愚妄^返亦^た安^に「い、
 安^{ンソ}」強^返ふ^可けむ乎。雜寶藏には舍利▲弗、次^きて上座^返と爲して施主に諸の慶を大集^返(せ)しむる
 (を)以^ての故^に食^し已^りて水^返を行^テ長者^返に對^ひて呪▲願して言^く。今日の良時に好寶^返
 を得て財利樂事。一切集れり。踊躍歡喜して心に悅▲樂す。信心勇發して十力^返を念せよ、今日^返(より)如^一似^ク、後に
 も常に然^るへしと、時^に摩^訶羅、苦^に誦^習(を)求^む。舍利弗免^返サ^不して意^に之^返を授^く、便^ち

565 亡人^返 (の) 爲^に 呪願すると「及」胡麻^返 (を) 損せると▲麥積^返 を遶り、塚の上と婦^返 を迎^ふると鷹^返 を驚^かシテ盗めるにと誇り、七^た ヒ棒打^返 (き) 被^れて方^に 祇桓^返 (に) 至^りて佛^返 (に) 白^す、佛の

566 ▲言^く。諸比丘、若し説法し呪願せむに當^に 時の宜^し き憂悲喜樂を^返 解^せよ、時非時^返 (を) 知^りて妄

567 説^返 (する) こと得^不 (れ)、七^{には} 食^返 (を) 受^け 食^返 (を) 行^く 雜法。四分律^の 中には麁^返 を

568 受^け 已^り 然^{して} ▲後に呪願す。今此の方には行^返 (か) 不^す、五分には餘方^返 に於て清淨と爲^せ 不^る 者を

569 是、亦^た ▲之^返 を行^待 (か) 不^れ (と) いふ、今、辯意長者子經^返 に依^りて いはは、受食の前に呪願せり。四

570 分^に 云^く。若^し 利^返 (の) 爲^の 故^に ▲施せは此^の 利、必^す 當^に 得^返 「當^に 再^讀 し、若^し 樂^返 (の) 爲^の 故^に 施せは後に必^す 快樂^返 を得^む (と) いふ、三千^{には} 威儀所^に ▲以^に 衣^返 を淨^くせしめ踞坐^し

571 して食する者。佛、始^め 道^返 を成^し て乳糜^返 を受^け 諸佛の法^返 を觀^る、皆^な 淨^衣 ▲衣^返 (を) 着

572 踞坐^し 而^し 食^し タマフ。若^し 出家の弟子^返 有^ら 是^の 法^返 の如^待 (く) 應^し、能^く 衆

573 戒^返 を防^待 (く) を以^て の故^に。▲踞坐して衣^返 を淨^にせむ(か) 爲^の 故^に。俗法^返 に異なるか故^に。

574 亦^た、草座食易^返 力爲^の 故^{なり}。踞坐^返 に因^りて ▲九法^返 を制^す (とい) は、一^{には} 脚前め却^く、二^に 脚^返 を闊^くル、三^{には} 搖動する、四^{には} 豎^つる、五^{には} 交^ル、六^{には} 三衣^返 (を) 垂^れて ▲足^返 (を) 覆^フ、七^{には} 翹^ツル、八^{には} 脚^返 を累^る、九^{には} 脾^を 累^る、竝^に 吉羅^返 を犯^す、二^に 衆生の食^返 (を) 出^待 (す) ことを明^さ は或^は 食前^返 に ▲在^り て等得^返 と唱^へ 已^り て、之^返 を出^す、或^は 食後^返 に在^り、經論^に 文^返 無^し、情^返 に隨^ひ 安^置 せよ。涅槃^{には} 曠野鬼^返 に因^り て爲^に 不殺戒^返 を授^け 已^り て鬼^返 に告^{けて} 言^く。我今當^に 聲^聞 弟^子 ^返 に勅^し て佛法^返 有^ら む處^返 に隨^ひ 悉^く 汝^か 食^返 を施^す へし、若^し 住處^返 に有^り て施^返 (すること) 能^待

579 (は) 不は「者」「イ、不者」。▲即(ち) 是天魔の徒黨なり、我か弟子(に) 非(す)、四分(には) 僧伽藍の中に鬼神の廟屋(を)
 580 581 を立(つ) といは、▲傳に云く、中國の僧寺には鬼の廟伽藍、神の廟、寶頭盧の廟(を) 設く、二▲食(に) 至(る) 毎
 582 に皆(な) 僧家より三處の食(を) 送る、餘の比丘は出(さ) 不、愛道尼經には出(さ) 令(む) こと押(す) ▲大(に) 依(り) て云(く)。
 (さ) の如(く) せ(よ)、今、亡人(の) 爲(に) 食(を) 設(く) 者(有) 中(含) (に) 依(り) て云(く)。
 583 若(し) 死人に布施し祭祀する▲者、若(し) 入(處) (の) 餓鬼の中(に) 生(れ) 者(得) (む)。餘趣は得(不)、各の活
 命の食(有) 由(る) 故(なり)。▲雜含の中に廣(く) 此の事(を) 明(に) せり、若(し) 親族、入(處) (の) 中(に) 生(れ)
 584 生(れ) 不(者) 但(し) 施心をもて、其(の) ▲自得功德(を) 施すれば云云 乃至施主の六趣の中(に) 生(れ)
 585 586 (れ) むに施福常(に) 隨(ふ)。持▲戒は但(た) 人身(を) 得(る) 以(て) 必(す) 餘の福をもて報(を) 助(く) 須(し)
 587 588 云云 譬喩經に。餓鬼五百は▲歌舞して而も行く。好人數百。啼哭して而も過(く)。佛の言(く)、餓鬼の家の兒子孫親▲眷。
 589 福(を) 作(ら) むか(か) 爲(の) 故(に)。得解脱(を) 行(し)、是(を) 以(て) 歌舞(す)。好人眷屬は。唯(し) 殺
 害(を) 爲(る)、福(を) 作(ら) むか(か) 爲(の) 故(に)。後(に) 大火に逼(め) らる。所(以) (に) 啼哭(す) 云云。
 590 智論(に) 云(く)。鬼神は▲人の一口の食(を) 得(て) 「而」千萬倍出すといへり「也」。僧(に) 當(に) 比座(の) 坐處(を)
 591 留(む) 「當」(再讀) し、食(を) 行(力) 人(を) 過(ぎ) 是(は) 默然(たる) こと得(不) 不(して) 「而」比座(を) 看(て) 語(ひ)
 592 是(の) 人(に) 與(ふ) 應(し) との等(ク) イヘ(り)。若(し) 食(を) 行(く) こと第三の人(に) 至(ら) 是(に) 當(に) 當(に) 先(つ) 盃(を) 澡(き) て豫(撃) (し) て至(ら) むを待(つ) へし、四分(には) 上座(に) 菓(を) 行(く) 送(り) 來(せ) せると、若(し)
 593 (し) 果(少) 少(く) して「而」多(く) 與(へ) 者、當(に) 問(ふ) 「當」(再讀) し、誰(か) 爲(に) 送(り) 來(せ) せると、若(し) 上座(の) 爲(に) せ(り) と
 594 遍(せ) 令(め) よ、乃至種種(の) 美食(も) 亦(た) 尔(なり)、半果經(に) 云(く)。育(玉)、僧(に) 半(菴) 菴(羅) 果(を) 施(する)

- に八萬の羅漢、同(く)共に之(返)を食(し)き、四分(には)食(返)を得て便(ち)俗(返)(の)爲(に)譏責(を)もてし
 ▲佛、等得(返)と唱(返)(へ)令(め)已(り)て然(して)後、食せよとノタマヒキ、僧祇には等共(返)と唱(り)、若(し)
 時、過(返)(き)むと欲(せ)は下(返)カムに隨(ひ)て隨(食)せよ、罪(返)無(し)、十誦に云(く)。等供。五分には尼請
 處して隨意食(返)と唱(返)(へ)未は口口に▲提(せよ)。下(衆)は吉(し)。十誦に舍利弗、上座(返)と爲(して)純(好)食(返)(を)
 食(待)せしに因(り)て、羅侯、▲佛(返)に白(す)、佛言はく。今(返)從(り)は上座は待(ち)て遍(返)を得、等供の
 聲(返)を聞(き)て一切の僧と共に食せよと。五分(には)▲正意をもて食(返)を受(け)よ、左手に一心に鉢(返)を擎(け)よ、
 右手、縁(返)を扶(さ)へよ、僧祇には當(に)先(つ)飯(返)を受(け)て一邊に案(着)して後に羹菜(返)を受(け)て和合して
 「而」食(す)。口の中に食(返)(を)廻(す)こと得(待)不(當)に一邊に嚼(ミ)之(返)を▲咽(む)へし、一粒をして地(返)
 に落(待)ち令(待)むること得(待)不(皮)核(カ)をは脚の邊(返)に聚(め)よ、増(一)の(中)に諸王、供(返)(を)設
 (け)て▲手(ラ)食(返)を行(く)、庶民も之(返)に同(しく)す、四分(には)若(し)二部の僧(返)(を)請(せ)は先(つ)比
 丘(返)に与(へ)よ、日(過)返(き)むこと恐(れ)者。一時に之(返)を与(へ)よ、梵摩難經には夫(れ)施(せ)む
 (と)欲(は)む者(は)皆(な)心(返)を平(シ)クす應(し)、大小(返)をは問(待)不(れ)、▲佛、阿難をして飯(返)に臨(み)て
 僧跋(返)を説(待)か)令(め)タマフ、僧跋と(い)ふ者。衆僧の飯、皆(な)平等なり(と)いふ、僧祇には▲食(時)には左
 手(返)を護(待)る)應(し)、當(に)左の手(返)を以(て)飲器(返)に受(け)て臂(返)に注(レ)ム、深(く)碗(の)縁(返)
 を含(待)む)こと得(待)不(額)鼻(返)に觸(れ)着(ケ)「及」飲(み)盡(返)くす)こと得(待)不(當)に少(し)許(返)(を)
 留(め)て口に飲(む)處(返)於(之)之(返)を寫(し)棄(つ)へし、次(に)下座(返)に与(へ)よ、沙弥食上に内(キ)亂(レ)シを
 もて俗の信(返)を壞(待)する)こと恐(る)、水(返)を以(て)澆(ス)酒(力)者犯(返)せ)不(れ)、水(返)を拵(せよ)、四分には、
 若(し)食分(返)を得(待)不(は)比(座)に爲(に)索(フ)へし、若(し)は半(返)を減(し)与(へ)よ、若(し)▲餘(の)果菜(返)有

610

609

608

607

606

605

604

603

602

601

600

599

598

597

596

611 鼻▲奈邪(に)云(く)。盃(を)捨(て)て大指(を)して盃中(へ)に入(ら)令(む)る(こと)得(待)不(れ)、十誦に、食
 612 手(を)着(け)らば▲振(ひ)却(く)こと得(待)不(れ)、之(を)拾(ひ)取(る)應(し)、僧(に)は嘔(吐)するこ
 613 と聲(を)作(し)て、食(する)こと得(待)不(れ)、鼻(を)縮(め)テ食(する)こと
 614 得(待)不(れ)、五分(には)。盃中の飯(を)は俗人の舍(に)散(する)こと得(待)不(れ)、食(を)益(せ)む時に口の中に
 615 ▲食(有(ら)者。須(手)須(た)不(との)等(く)云(ふ)こと)得(る)に過(無(し)、僧(に)は)口(に)食(有(る)に)人と共に語(ら)者。咽(み)▲盡(し)て方(に)云(へ、口(の)内に食(有(り)て)は即(答)す(る)こと)得(待)不(若
 616 (し)聲(異(なら)不(は)食(を)含(み)ても語(る)こと)得(よ、▲四分(には)乾(き)たる餅(焦(レ)たる餅、
 617 果(菜)等(を)は半(を)噛(む)こと)得(へし、善(見(には)盃中の飯(を)は擦(り)取(り)て衆(生(に)▲与(へ)よ、水(を)白
 618 衣(の家)に棄(つ)るは犯(に)あら)不(隠(處)不(淨(一)處(に)着(ク)應(し)と)いふ、
 619 ▲八(に)食(し)竟(る)法(とい)は僧(に)は上(座)は徐(徐(く)食(す)應(し)、速(に)竟(り)て住(テ)年少(の)▲狼(狼)食(し)飽(満)
 620 (せ)不(待)る(る)こと)を看(る)こと)得(不(れ、相(ひ)望(み)て之(を)看(ル)應(し)、乃至(水)を行(カ)ムこと
 621 待(ち)て隨(順)呪(願(し)▲已(り)て然(して)後(に)乃(し)止(め)よ。又(た)云(く)、居士、僧(に)飯(し)
 622 訖(り)て遣(遣)餘(の)食(を)は料(理)して比(の)舍(に)与(へ)よ、▲賢(愚(の)多(の)處(の)文(なり、俗(家(に)於(ても)先(つ)水(を行(
 623 (き)て後(に)食(を)下(キ)澡(嗽(す)との)等(く)い(へ)り、雜(含(には)▲佛、及(ひ)比丘、俗(家(にして)食(し)竟(り)て各(の)
 624 澡(嗽(し)盃(を)洗(ひ)訖(り)て然(して)後(に)俗(人(の)爲(に)説(法(した)ま)ヒキとい(へ)り、九(に)大(囀(一)
 法(とい)は)。五分(には)食(の)後(に)衣(物(を)施(する)を、名(け)て唾(嚙(と爲(也)▲四分(には)食(竟(り)て黙(して)去(る)
 (る)に▲由(り)て、檀(越、疑(を)生(して)食(の)好(と)不(好(と)足(と)不(足(と)を)知(ら)不(又(た)言(く、諸(の)

625 ▲外道(の)人皆(な)布施(返)を稱歎し檀越(返) (を) 讚美す(との)等くいふ、佛、上座をして爲に大嘯(返)を説き、▲乃

626 (ち)一偈(其(の)文)受食法(の)如(し) (に)至(ら)令(む)、若(し)上座、能(返)へ不は語ラへ、説(返) (く)

627 能(へ)者若(し)語(返) (は)不、受(返) (け)不(は)竝(に)罪(を)▲結(はむ)。若(し)大嘯(返)を説かむ時には

上座四人相(ひ)待つ、餘の者は去(返) (る)を聽す、薩婆多(には)▲要(す)食(し)て後に法(返)を説け、四益(返)有

(り)、一(には)信施(返) (を)消(待) (たむか)爲(の)故(に)。二(には)恩(返) (を)報(待) (せむか)爲(の)故(に)。

628 三(には)歡喜の心(返) (を)▲生(待) (せ)令め善根成就するか故(に)。四(には)在家の人は財施(返) (を)行(待) (す)應

629 ぐ、出家の人は▲宜く法施(返) (を)行(待) (せむか)爲なり、律の中には契經(返) (を)説(待) (か)令(め)たり、善見(に)云

比丘、破戒▲邪見諸根不具の者(返) (を)請(し)て歎(し)説法(せ)しむ。此(返) (に)因(り)て惡人、勢(返) (を)得て又(た)

能(く)僧(返) (を)辱(ハ)チシム、▲佛、言(く)、法師三藏諸根具足せる者(返) (を)請(して)伽(せし)めよ(と)云(ふ)。若(し)

能(く)唄(返) (を)誦する者(返) (無(く)は當に▲次第に差(返) (ふ)「當(再讀)し、若(し)都て無(く)者(各(の)一偈(返)

を誦せよ、能(ハ)タラム者の受(返) (せ)不は偷蘭。半唄(返) (すること得(待)不れ、▲吉羅律に諸惡一偈(返) (を)説(待) (か)令

(め)たり、増一(に)解(し)て云(く)、諸惡莫作といは戒具足して清▲白之行あるなり。諸善奉行といは心意清淨なるなり、

自淨其意といは邪顛倒(返) (を)除(く)なり、是諸▲佛教と(いは)「者(一、佛教者(といは)愚或の想(返) (を)去(る)なり、戒淨

(の)故に意淨し、意淨(する)か故に倒(返) (無し、倒(返) (無(きか)故に或▲想滅す。今此の世に、初より説法之式(返) (無

(し)、若(し)食竟(り)て竝(に)錢財(返) (を)將て施与(返) (すること有(ら)は▲理、五分(返) (に)准(し)て時(返) (に)

隨(ひて)稱美せよ、華(平) 修(返) (すること得(待)不、廣(く)前(に)説(返) (けるか)如(し)、

▲十(に)請家(返) (より出(つる)法(といは)五分には寺(返) (に)還り去る時には上座八人をは相(ヒ)待(ち)て餘人は前(テ

640

639 638 637 636 635 634 633 632 631 630 629

641 去(る)。▲應(に)僧徒座(返)從(り)して「而」起(ち)て衣盃(返) (を)整理して乃至次第に「而」行(く)へし。請門
 642 の首(返) 二至(りて)▲告(け)て云(く)。檀越厚施如法なり、貧道、何(の)徳かある、之(返)に堪(へ)む、餘の言は、
 643 時(返)に隨(ひ)語(と)己(り)て▲便(ち)去(る)。雜合(に)云(く)。佛、及(ひ)比丘、食(し)竟(り)て皆(な)
 644 禪室(返)に入(り)て坐禪し晡時に禪(返)從(り)▲起(ち)て「而」法(を)説(と)けといへり「也」。

訓読注

- 5 にーコノヲコト點ハ縱長ナリ。
 8 登ーコノ字ニ返點「ニ」アリ。
 9 令ーコノ字ノ右肩破損ニ朱點アリ。ヲコト點
 「しむ」ハ「捨」字ニアリ。
 18 衆ー右傍朱書「頭陀」書入。
 24 處ー朱返點アリ。
 26 處ーヲコト點「を」アリ。
 27 通ー右傍朱書「於佛法也」書入。
 46 染ーコノ字虫損、ヲコト點「たる」虫損。
 すーコノヲコト點ノ位置不審。
 58 をーコノヲコト點ハ縱長ナリ。
 64 近ーコノ字ニ句點アリ。
 74 七ーコノ字ノ左下ニ朱汚アリ。
 76 時ニモー右傍朱書補入。
 79 不ー仮名「サレ」ハ「瘰」字ニアリ、仮名「レ
- 124 具ー返點アルカ。
 119 入ー虫損。
 107 數ー返點アルカ。
 104 空ー合符ハ「の」ノヲコト點ナルカ。
 101 不ーヲコト點「す」ハ「令」字ニアリ。
 95 食ーコノ字ニヲコト點「に」アリ。
 94 廣ー右傍ニ某朱假名アリ。
 90 腹ーコノ字ノ(訓)ハ字ノ中寄ニアリ。
 89 患ーコノ字ニヲコト點「を」アリ。
 87 多ー下補。
 84 多ー下補。
 80 多ー下補。
 80 レー「圍」字ニアリ。
 80 多ー下補。
 135 得ー左傍ニ返點「ニ」アルカ。
 133 利ーコノ字ニ返點擦消アリ。
 135 少ー「ハ」ノ上虫損。
 156 正ー右傍假名「タ、シク」ハ虫損。
 156 正ーコノ字ニヲコト點「か」アリ。
 160 もてーコノヲコト點存疑。
 161 のーヲコト點虫損。
 161 門ー右傍朱書補入。
 162 四ーコノ字ニヲコト點「に」「は」擦消アリ。
 162 盛ーコノ字ニヲコト點「て」アリ。
 163 張ーコノ字ニ返點アリ。
 164 坐ーコノ字ニヲコト點「を」アリ。
 169 食ーコノ字ニヲコト點「せ」「き」アリ。
 179 句點ーヲコト點「て」カ。
 180 僧ー右傍「〇」ニ「初篇目」書入。

181 法一右傍ニ本文ニ 初叙來意ニ 初明道俗

義同」書入。

景仰一コノ字ノ左肩ニ「・」點アリ。

立一コノ字ニ墨句點アリ。

謙一コノ字ノ左裾ニ「・」點アリ。

章一コノ字ニ墨句點アリ。

遜一コノ字ノ左裾ニ「・」點アリ。右傍朱

書「隨也」書入。

コ一墨假名。

183 182 耳一コノ字ニ墨句點アリ。

故一右傍ニ引經証「書入。

184 學一コノ字ニ墨句點アリ。

比時一右訓「コノコロ」合符ハ墨書。右傍

ニ「三行時顯意」書入。

亡一コノ字ニ墨句點アリ。

奄一右訓「タチマチニ」ハ墨假名。

186 185 能一コノ字ニ墨返點アリ。

華一コノ字ニ墨返點アリ。

斯一コノ字ニ墨返點アリ。

187 誠一コノ字ニ墨返點、句點モアリ。

中一右傍ニ「開章尺二 初分章」書入。

初一右傍ニ「正尺二〇 初僧像本篇二 初分

章」書入。

意一コノ字ニ墨句點アリ。

188 相一コノ字ニ墨句點アリ。

初一右傍ニ「隨尺三 初制相敬二 初敬佛

意」書入。

189 敬一コノ字ニ墨返點アリ。

爲一コノ字ニ墨待點アリ。

身一コノ字ニ墨返點アリ。

養一コノ字ニ墨返點アリ。

190 天一コノ字ニ墨返點アリ。

下一コノ字ニ墨句點アリ。

トキ一墨假名

中一コノ字ニ墨返點アリ。

常一右傍ニ「朱ニテ「苦」ノ補入アリ。

佛一コノ字ニ墨返點アリ。

佛一コノ字ニ墨返點アリ。

礼一コノ字ニ墨句點アリ。

之一コノ字ニ墨返點アリ。

相敬一右傍ニ「相敬意三 初相立敬之意」書

入。

者一コノ字ニ墨句點アリ。

句點一朱書、墨書アリ。

196 194 定一右傍朱書「空」書入。

敬一コノ字ニ待點アリ。

句點一朱書、墨書アリ。

法一コノ字ニ墨句點アリ。

譽一コノ字ニ墨句點アリ。

道一コノ字ニ墨句點アリ。

199 197 送一「逆」字ニ重書。

訊一コノ字ニ墨句點アリ。

大一右傍ニ「引因果勸修」書入。

201 等一コノ字ニ墨句點アリ。

敬一コノ字ニ墨句點アリ。

202 行一コノ字ニ墨返點モアリ。

時一コノ字ニ墨句點アリ。

拜一コノ字ニ墨返點モアリ。

佛一コノ字ニ墨返點アリ。

中一コノ字ニ墨返點モアリ。

等一コノ字ニ墨句點アリ。

丘一コノ字ニ墨返點モアリ。

等一コノ字ニ墨句點モアリ。

智一右傍ニ「三明坐立之意」書入。

坐一コノ字ニ墨返點モアリ。

206 令一コノ字ハ本行「命」字ヲ右傍朱書シテ訂

- 207 坐一コノ字ニ墨句點アリ。
 三道一右傍朱書「者三果以下乃至凡夫遣」
 書入。
- 210 209 辨一コノ字ニ墨返點モアリ。
 破一コノ字ニ墨返點モアリ。
 故一コノ字ニ墨句點モアリ。
 中一コノ字ニ墨返點モアリ。
 二一朱庵點アリ。右傍ニ對敬立縁合ニ
 初標章 二正尺ニ 初不應礼二初一書入。
 寶一右傍ニ書入。
- 217 213 二一右傍ニ應礼ニ 初標分一書入。
 初一右傍ニ隨尺ニ 初無縁合敬一書入。
- 227 226 219 四一右傍ニ有縁不礼一書入。
 三一右傍ニ立敬儀式ニ 初標分一書入。
 初一右傍ニ隨尺三 初敬佛法ニ 初標章一
 書入。
- 232 若一右傍ニ隨尺ニ 初先示敬儀六 初受要
 功勝一書入。
 増一右傍ニ承事感報一書入。
 諸一左肩ニ墨點アリ。
 聲一コノ字ニ墨返點アリ。
- 235 自一右傍補入。
 237 供一左肩ニ墨點アリ。
 238 智一右傍ニ設礼儀式一書入。
 239 礼一朱書右傍補入。
 241 五一朱書右傍補入。
 247 先一右傍補入。
 249 智一右傍ニ四對境用心一書入。
 251 毘一右傍ニ五入塔法一書入。
 255 邊一右肩ニ墨點擦消アリ。
 260 五一右傍補入。
 265 念一コノ字ニ返點カスレアリ。
 266 五一右傍ニ六旋繞法一書入。
 佛一右傍ニ尺ニ初惣行非法ニ 初通行輕慢
 之相ニ 初行非致毀一書入。
 臂一コノ字ノ左傍中央ニ墨點アリ。
 故一右傍ニ引教伸誡一書入。
 攝一墨仮名「セフ」、墨入聲點アリ。
 比一右傍ニ別行居床設礼一書入。
 十一右傍ニ雜列敬相四 初供具等法一書入。
 得一句點アリ。
 大一右傍ニ遺身利物一書入。
- 278 故一コノ字ノ左下角ニ墨汚アリ。
 285 僧一右傍ニ三修供時節一書入。
 287 四一右傍ニ四相敬遠益一書入。
 289 次一右傍ニ敬僧法ニ 初標章 二正尺ニ
 初攝衆開徒立一書入。
 せ一コノ字ト點ハ「者」字ニアリ。
 若一右傍ニ受讚須師礼一書入。
 理一右傍ニ某朱仮名アリ。
 290 次一右傍ニ三大小致礼法ニ 初標章一書入。
 291 毘一右傍ニ正尺六 初制敬本意一書入。
 293 四一右傍ニ五衆相礼ニ書入。
 分一右傍ニ初通明五衆ニ 初次礼人塔一書入。
 小一右傍補入。
 296 二一右傍朱書補入。
 298 五一右傍ニ礼師屍塚一書入。
 298 養一左下ニ墨點アリ
 莖一朱ニテ見消シテ上欄外ニ朱書「葬」書入。
 300 四一右傍ニ別示沙弥ニ 初明次第一書入。
 301 問一右傍ニ尺疑一書入。
 302 す一コト點ママ。
 303 名一コノ字ニ返點アリ。

- 337 336 333 331 330 329 323 320 318 316 311 308 308 306 304
 - 四―右傍「三致礼諸相」書入。
 - 和―右傍補入。
 - 札―コノ字ニ返點アリ。
 - 毘―右傍「四約夏分位」書入。
 - 僧―右傍「五共坐階降」初明大僧」書入。
 - 伽―右傍「二示餘衆」書入。
 - 僧―右傍「六五受礼慰勞」書入。
 - 二―右傍「〇二造像法附」初牒章」書入。
 - 初―右傍「二正尺」初造像塔法」初造像
 - 二 初通叙經像意」書入。
 - 佛―本行「經」ヲ下欄ニ朱訂。
 - 恐―右傍「二正明造像」初中國造立无縁」
 - 書入。
 - 躬―右傍墨訓「ミツカラ」。
 - 今―右傍「二此方制度漸失」初前代近眞」
 - 書入。
 - 嶺―コノ字ニヲコト點「に」アリ。
 - 仿髣―右傍墨訓「ハウヒ」アリ。
 - 今―右傍「二後世失法」初明非法」書入。
 - 致―右傍「二示過患」書入、抹消。
 - 妬―右傍墨訓「コ」、左傍墨注示符、下欄「妬」
 - 書入。

- 391 388 387 381 378 375 368 367 364 351 348 347 346 344 342 339 338
 - 得―右傍ニ墨汚アリ。
 - 匠―「を」ノヲコト點擦消。
 - 致―右傍「二示過患」書入。
 - 若―右傍「三明應法」書入。
 - 善―右傍「三西土靈儀」書入、右傍朱汚アリ。
 - 次―右傍「二造塔法」初牒章」書入。
 - 雜―右傍「二正尺六」初示名」書入。
 - 儼―下欄朱ニテ「兪」トアリ。
 - 增―右傍「二顯報」書入。
 - 四―右傍「三敬護」書入。
 - 僧―右傍「四造處」書入。
 - 善―右傍「五供養修治」初勸化供養」書入。
 - 至―本文「志」ヲ見消、右傍朱書訂正。
 - 至―本文「志」ヲ見消、右傍朱書訂正。
 - 若―右傍「二見塔塗治」書入。
 - 若―右傍「三造立莊嚴」書入。
 - 旛―コノ字ノ下ニ補入符アリテ右傍「蓋」
 - 書入。
 - 王―コノ字ニ墨句點アリ。
 - 馨―コノ字ニヲコト點「を」擦消アリ。
 - 不―右傍「四接續毀損」書入抹消。
 - 得―右傍「四接續毀損」書入。
 - 像―右傍墨點アリ。
 - 完―コノ字ハ某字ニ重書、右傍墨仮名「マタ
 - キ」アリ。
 - 之―墨句點アリ。
 - 作助―コノ二字間中央ニ朱合符アルカ。
 - 若―右傍「五校量福報」書入。
 - 來―墨返點モアリ。
 - 德―墨返點モアリ。
 - 歎―コノ字下方ニ補入符アリテ右傍「至心恭
 - 敬」書入。
 - 別―墨句點アリ。
 - 無―右傍「六造毀」二報三 初掃治善報」初
 - 无垢女經」書入。
 - 爲―返點擦消。
 - 作り―「圓」字右傍ニ補入。
 - 弗婆提―「弗」提」字ニ墨注示符アリテ上
 - 欄「東勝身州」書入。
 - 佛―上欄外朱書補入。
 - 地―右傍朱書補入。コノ字ニ付シタ返點ハ
 - 「塔」字ニアリ。
 - 燒―右傍朱書補入。

406 405
越一右傍朱書「曰」書入。
佛一右傍補入。

地一右傍朱書補入。朱書二墨書重書。返點ハ「塔」字ニアリ。

兼一右傍、彼人命終生閻浮提富樂自在於彼人命終生三十三天。唐本無之。書入。

淫一右傍「二涅槃偈」書入。

409
佛一コノ行ノ紙背ニ「私云藥師淨土ハ中恒河沙也」經云於此東方過二十恒河沙等世界名

曰不動〇具佛号曰滿月光明如來正文ノ又偈云 不犯僧鬘物 善守於佛物 塗掃佛僧地

則生不動國〇造像及佛塔 猶如大海指

常生歡喜心 則生不動國文」書入。

心一右傍「則生不動國」書入。

智一右傍「二隨時供養」書入。

養セム一右傍朱書補入。

411 410
十一右傍「三毀壞惡報」書入。左傍二墨點アリ。

云一右傍補入。

413
二一朱庵點アリ、右傍二二造寺法二 初標章

二正示二 初愍示所引」書入。

414
有一右傍二墨假名「ル」ニアリ。

415
准一右傍二墨假名「レリ」アリ。
等一右傍二墨假名「ヨイウ」アリ。

引一右傍二墨假名「キ」アリ。
科一右傍二墨假名「ワカツヘシ」アリ。

416
謂一右傍「二正引法式二」書入。
所一右傍「初應法生善」書入。

カタハラ一「側」字ノ右傍ニアリテ「傍」字

ノ右傍二類例スベキ符号アリ。

ホトリ一「傍」字ノ右傍ニアリテ、「側」字

ノ右傍二類例スベキ符号アリ。

潔一「素」字ニ加筆。

壞一右傍墨汚アリ。

417
凡一右傍墨汚アリ。

419
以一右傍朱書補入。

421
但一右傍「二無法致損四 初造立非法」書入。

教一右傍「律也」朱書書入。

422
ヒ一左傍假名。

423
又一右傍「二騰踐毀壞」書入。

424
莊一右傍「店」朱書書入。

426
借一右傍朱假名「イウシ」アリ、不審。

427
喪一右傍二墨假名「サウ」アリ。

若一右傍「三引勸俗流」書入。

428
良一「之」二重書シテ訂正。
良一「之」二重書シテ訂正。

429
人一右傍朱書補入。返點ハ「塔」字ニアリ。
因一右傍「四因誠道衆三 初自敬生信」書入。

431
假一右傍「二擧俗現道」書入。
被一「披」字二重書。

432
由一右傍「三結示自失」書入。

433
ル一「コノ」假名ハ「薄」字ニアリ。

442
訃一右傍「〇二初篇目」書入。

443
夫一右傍「二本文二 初叙意生起」書入。

444
惑一「コノ」字二墨句點アリ。

445
慢一「コノ」字二墨返點アリ。

446
誘一「コノ」字二墨返點アリ。

中一右傍「初列章」書入。

447
就一右傍「二分章解尺二」書入。

就一「コノ」字ノ右傍二「二」擦消アリ。

448
初一「コノ」字二返點アリ。

初一朱庵點、右傍二二隨尺十 初受請法二 初標章」書入。

451
十一右傍「二正尺九 初來請等法」書入。

452
名一「コノ」字二返點モアリ。

453
五一右傍「二俗家敷設」書入。

457 増一右傍「三許請之相」書入。

460 五一右傍「四對請□□」書入。

462 丘一右傍「を」返點擦消アリ。

464 得一返點擦消アリ。

466 四一右傍「五僧別二請」書入。

468 云一某字擦消二重書。

469 苦一「若」字二重書。

470 墮一「隨」字二重書。

471 今一右傍「六改正筆注」書入。

474 字一「下補」。

477 薩一右傍「七往訃是非」書入。

488 彌一右傍「七往訃是非」書入。

484 彌一右傍「七往訃是非」書入。

489 彌一右傍「七往訃是非」書入。

480 彌一右傍「七往訃是非」書入。

478 彌一右傍「七往訃是非」書入。

484 彌一右傍「七往訃是非」書入。

488 彌一右傍「七往訃是非」書入。

489 彌一右傍「七往訃是非」書入。

安一右傍「初安置四醒位二初示鋪設」書入。

495 潔一「素」字二重書。

497 不一右傍「二行非法」書入。

500 僧一右傍「二敷床列坐」書入。

502 爭一右傍「二墨返點アリ」。

505 會一右傍「二墨返點アリ」。

506 四一朱庵點、右傍「四就座命客二初標章」書入。

507 彼一右傍「二正尺六初入位隨座」書入。

510 上一墨合符アリ。

511 下一右傍「二墨汚アリ」。

514 僧一右傍「二三慰問施家」墨書擦消。

518 其一本行「爲」字ヲ墨見消シ右傍二訂セリ。

519 四一右傍墨書擦消ノ上ニ二相問大小書入。

517 僧一右傍墨書擦消ノ上ニ二三慰問施家書入。

516 イタシハク一訓點ノママ。

515 食一此字下二補入符、右傍「家唐本」書入。

514 四一右傍「四无缘後往」書入。

518 僧一右傍「五訶止喧笑」書入。

519 咲一「口」ハ後補。

522 五一右傍「六外客聽不」書入。

524 往一右傍「二ヲコト點」ヨアリ。

527 也一右傍「二墨句點モアリ」。

528 五一右傍「五觀食淨行法二初標章」書入。

530 四一右傍「二正尺二初審問作淨」書入。

532 僧一右傍「二給付不來」書入。

536 六一右傍「六行香祝願法二初標章」書入。

537 四一右傍「二正尺四初祝願前後」書入。

538 若一右傍「二讀誦可不」書入。

539 增一右傍「三行香儀則三初引本緣」書入。

541 若一右傍「二三示離過」書入。

543 シ一右傍「假名ハ」控」字ニアリ。

548 シ一右傍「假名ハ」放」字ニアリ。

545 フ一右傍「假名重書」。

541 行一右傍「三明作唄」書入。

544 四一右傍「四祝願隨機二初通示隨機」書入。

548 比一右傍「二正法式四初行非標不」書入。

546 鼎一右傍「二墨假名「テイ」墨平聲點アリ」。

548 條一「修」字二重書。

555 僧一右傍「二列示諸法」書入。

560 長一右傍「三引聖況凡」書入。

555 雜一右傍「四引愚證失」書入。

- 599 597 596 595 592 590 589 583 582 577 575 570 567 563
- 摩訶羅「右傍朱書」无智僧「書入。
七」朱庵點、墨汚アリ。右傍「七受方法食二
初標章」書入。
四「右傍」二正尺三 初受食法式二 初呪願
受食」書入。
三「右傍」二踞坐離過」書入。
二「右傍」二明衆生食二 初示前後」書入。
涅「右傍」二明所爲三 初引諸文示法」書入。
今「右傍」二勸改發行施」書入。
入「人」字二重書。
餓「餘」字二重書。
智「右傍」三明所施非多」書入。
僧「右傍」三行食雜法六 初行食法」書入。
坐「コノ字ニヲコト點」の「擦消アリ。
ヒカキ」訓點マヌ。
四「右傍」二唱□□」擦消。
四「右傍」二唱等法」書入。
實「コノ字ノ左下ニ墨點アリ。
共「コノ字ニ注示符アリテ、下欄「供唐本」書
入。
五「右傍」三正受法」擦消。
五「右傍」三正受法」書入。
- 631 630 628 627 623 621 618 614 612 611 609 606 605 603
- 四「右傍」四等施法」書入。
僧「右傍」五〇明等法」書入。
左「コノ字ニ注示符アリテ、下欄「右唐本」書
入。
注「左傍朱書」入也」書入。
索「左傍朱書」乞也」書入。
十「右傍」六喫食雜法」書入。
耶「右傍補入。
と「コノヲコト點ノ位置不審。
八「右傍」八食竟取斂法二 初標章」書入。
僧「右傍」二正尺二 初相待」書入。
賢「右傍」二行」書入。
九「右傍」九囉囉布施法二 初標章」書入。
五「右傍」二正尺七 初示名」書入。
四「右傍」二引緣」書入。
黙「コノ字ニ注示符アリテ、上欄朱書」嘿」
書入。
薩「右傍」三後說之意」書入。
有「朱庵點アリ。
宜「左傍」二朱某書入アリ。
律「右傍」四所說之法」書入。
五「右傍」五能說之人」書入。
- 643 640 639 638 635
- には「コノヲコト點八」五」字ニ加點。
律「右傍」六尺一偈之義」書入。
今「右傍」七明財施之式」書入。
修「右傍」二朱假名アリ。
十「朱庵點アリ。右傍」十出請家法二 初標
章」書入。
五「右傍」二正尺二 初出請家法」書入。
雜「右傍」二歸本處法」書入。